

明治維新150年記念連載コラム

「明治維新と薩摩藩」

多くの教訓を得た「薩英戦争」 — 1

➤ 2013.04.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)



薩英戦争記念碑



旧薩摩砲台跡



薩英戦争絵巻

(鹿児島市維新ふるさと館所蔵)

<攘夷の不可能を知る>

今年、「薩英戦争」150周年の年にあたります。文久3年（1863年）7月、薩摩藩は、前年8月に起きた「生麦事件」に伴うイギリスとの賠償問題が決裂、7月2日から3日にかけて鹿児島湾を舞台に、7隻のイギリス艦隊と砲火を交えました。「薩英戦争」は、日本が欧米先進国と本格的に戦火を交えた初の戦いでもありました。薩摩は、開明的藩主島津斉彬の時代から「砲艦外交」の脅威を聞かされ、集成館事業を起こして備えていました。しかし、薩英戦争という実戦を通して、その威力をまざまざと見せつけられたことによって、下級武士までが「攘夷の不可能」を思い知らされました。それゆえ、薩英戦争は、その後の薩摩藩の方向性を決定づける大きな要因ともなりました。

<薩英戦争の原因となった「生麦事件」>

「生麦事件」とは、島津久光の行列が、横浜の生麦村（現横浜市鶴見区）にさしかかった際、女性1人を含む4人のイギリス人が馬で行列に乗り込んだため、供侍たちがイギリス人3人を殺傷した事件です。イギリスは幕府に対し10万ポンド（40万ドル）の賠償金を、薩摩には2万5千ポンド（10万ドル）と犯人の引き渡し、及びイギリス士官の立会いのもとにこれを処刑することを要求してきました。

多くの教訓を得た「薩英戦争」― 2

<交渉決裂から薩英戦争へ>

幕府は賠償金を支払いましたが、薩摩は応じませんでした。そのためイギリスは、軍艦7隻をもって薩摩に直接交渉を迫ってきました。しかし、交渉は決裂、薩英戦争の火ぶたがきられました。薩摩藩は、台場を鹿児島城下沿岸に6か所、対岸の桜島側に4か所、合計10か所設け、80～150ポンド砲数門を含む86門を備えて迎え撃ちました。イギリスはこの戦いで初めて実戦に使ったという最新式のアームストロング砲を含む89門の砲で応戦しましたが、天候も悪く海も荒れ、湾の状況にも不案内なイギリス艦隊は、旗艦ユーリアラス号の艦長及び副艦長が直撃弾を受けて即死するという不運も重なり、艦隊は退却したのです。イギリスの死傷者63人に対し、薩摩は死傷者23人でしたが、砲台はことごとく沈黙させられ、鹿児島城下の約500軒余りが焼失、薩摩が誇る先進工業団地「集成館」も壊滅しました。

<富国強兵、殖産興業など近代化を加速>

薩英戦争は、世界に視野を広げ薩摩を近代化へ導くとともに、近代国家建設の意義と勇気を与えた大きな試練であったといえます。

以後、近代工業の大切さを痛感した薩摩は、「集成館事業」の再建充実とともに、以前にもまして新しい技術や文化の導入、人材育成のための留学生派遣など、近代化への基盤固めを確実に進めていきました。

薩英戦争に対するイギリスの反響― 1

➤ 2013.07.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)



薩英戦争記念碑



旧薩摩砲台跡



薩英戦争絵巻

(鹿児島市維新ふるさと館所蔵)

今から150年前の薩英戦争は、イギリス本国ではどのような反響があったのでしょうか。文久2年（1862年）、生麦事件で暗殺されたリチャードソンは一人息子でした。彼の父親が事件発生を知ったのは、事件発生から2か月後の新聞報道でした。父親は、外務卿のラッセル氏に問い合わせの手紙を書きましたが、まだ詳細がつかめていない旨の返事をもらいます。新聞報道から20日後にやっと日本のニール代理公使から事件概要の書簡が外務省に届けられました。

イギリスでは、薩摩に関する情報はほとんどなく、報復のための基礎的資料にも乏しいため、最悪の場合は「交戦もやむなし」との方針だったようです。事件発生から約3か月を経過して、やっと駐日代理公使ニールに次のような指示を与えました。薩摩に対し、犯人の処刑と賠償金2万5千ポンド（10万ドル）の支払いを要求し、もし薩摩がそれを拒み、又は引き延ばした場合は相応の措置をとることの指示でした。

こうしたイギリスの再三の要求にも応じなかった薩摩に対し、イギリスは7隻の艦隊を鹿児島に派遣、さらに交渉を重ねましたが決裂し交戦となりました。暴風雨のうえに、旗艦ユーリアラス号の艦長、副艦長が直撃弾を受け即死するなど悪条件も重なり、退却せざるをえませんでした。

薩英戦争に対するイギリスの反響―2

イギリスは、「薩摩は九州島の西南の端」との情報程度しかなく、居城の砲撃か、又は港の封鎖かを提督らの判断に任せるとの指示でした。当時はまだ山川湊の海図しかなく、鹿児島湾内の水深を測りながらの航行でした。測量専門技師をわざわざ上海から呼び寄せ、さらに薩摩に来たことのある日本人水先案内人を横浜で雇いました。案内人から、谷山沖に「七ツ島」があると聞き、そのどこかの島に7隻の軍艦が停泊できると思っていました。七つの小さな岩が海中から突き出ているだけだったことに驚いています。「沖小島」を「ニール島」、桜島の小池海岸周辺を「ユーリアラス湾」、鹿児島湾の「神瀬」を測量技師パーカーの名から「パーカー瀬」と名付けています。

戦争の結果はイギリス本国に報告されました。ビクトリア女王は交戦になるのではないかと懸念していたことが現実となり、英国議会の開会挨拶の中で、鹿児島市民に多大な被害を与えたことに対し遺憾の意を表明しています。イギリス国内においては、英国艦隊の行動を批難した住民の抗議集会などがあり、各地で批難の決議や書簡が政府や報道機関に寄せられています。交戦時に砲台を壊滅する必要はあっても、市街地を焼き払い、一般市民に多大な被害を与える行為は許せないとの声であり、人道的な立場からの深い同情の念が示されたものでした。イギリス艦隊が、再び鹿児島砲撃に向かわなかったのは、こうしたイギリス本国の事情があったからだといえます。

幕末の思想「開国と攘夷」— 1

➤ 2013.12.01

➤ 著者：福田 賢治



薩英戦争記念碑
(祇園之洲公園内)



薩英戦争に使用された80ポンド（36kg）
の主力砲（薩藩海軍史）

1.開国に反対した理由とは

幕末にペリーが来航して以来、「攘夷か、開国か」の議論が全国に広がり国論を二分した。当時、開国に反対した理由の第一は、開国による貿易の利は、幕府の独占的利益となったからである。第二に、国内の物資が外国に流れ、国内の物価上昇を招いたからである。第三は、当時、国内における金と銀の交換比率は1対5であったが、外国では1対15であり、日本において銀貨5枚で得た金を上海などで交換すると銀貨15枚となり、およそ3倍の儲けとなったのである。この結果、日本の金が外国に流れ、国内の物価上昇の原因ともなった。しかし、最も大きな理由は、当時の孝明天皇が「攘夷思想」の持ち主であったからである。それ故、「尊王」を唱えれば唱えるほど「攘夷」も強調され、幕末、勤王の志士たちによって「尊王攘夷」が一層強く叫ばれるようになったのである。

2.薩英戦争で攘夷の不可能を悟った薩摩

琉球貿易や密貿易をしていた薩摩の本音は「開国」であった。また、「挙藩一致、どこまでも御所を守れ」という島津齐彬の遺言もあり、「尊王」は強く唱えても、「攘夷」と正面きって唱えることには抵抗があった。実際「薩英戦争」を経験したことによって、薩摩では下級武士にいたるまで攘夷の不可能を知ったのである。中央政界で薩摩と主導権争いをしていた長州藩は、こうした薩摩の事情を察知し、「尊王攘夷」を唱えることによって薩摩を牽制したともいわれる。

幕末の思想「開国と攘夷」— 2

3. 「攘夷思想」の起こりは「中華思想」

「攘夷思想」は、もともと中国の儒教思想からでたもので、中国の「中華思想」に始まるといわれる。つまり、中国に古代文明が発達したことから、中国こそはすべての文明文化の中心であり、その他の国々は「夷狄いてき」、つまり野蛮な国であるとする「中華思想」の考えから生まれたもので、これが儒教思想の中に根付き、儒学とともに日本に入ってきたといわれている。古来、中国は広い国土を抱えその中央地域は豊かであるが、周辺地域、特に北方や西方は山岳地帯や寒冷地、砂漠地帯など厳しい環境におかれた地域が多い。加えて、世界で最も多くの異民族をかかえた多民族国家なのである。そのため、周辺地域の民族は、常に豊かな中央部に進出しようと企て、民族間の争いが絶えず、過去において様々な民族が王朝建国の争いをしてきた歴史を持つ。王朝が変わるごとに、その保持のため、外部からの侵入者を「夷狄」として排斥する思想が「攘夷思想」といわれるものである。

4. 官学とした「儒学思想」で滅んだ幕府

幕末、攘夷思想をもった勤王の志士といわれる人々の多くは、攘夷を説く水戸藩の藤田東湖や戸田忠太夫など「水戸学」といわれる人から学んだか、またはその流れを汲む人たちである。「儒学」、中でも「朱子学」は、江戸時代に幕府の官学として栄えたものであるが、その儒学から生れた「攘夷思想」が、幕末には倒幕運動の中心思想になったというのは、まことに皮肉なものである。

日本吹奏楽の始まりと薩摩— 1

➤ 2014.04.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

1.いち早く西洋音楽を導入した薩摩

日本で最初に西洋音楽を導入し、吹奏楽を始めたのは薩摩の軍楽隊でした。薩摩は明治2年、軍楽伝習生30人余りを横浜に派遣、イギリスの軍楽隊長ウイリアム・フェントンから西洋音楽を習います。これは、西洋音楽を日本人が本格的に習った始まりでした。幕末に鼓笛隊はありましたが、吹奏楽はありませんでした。開国により、国家間の義礼式で国旗を掲げ、国歌を演奏するようになりましたが、日本には島津斉彬が発案した「日の丸」が、国旗としての役割を果たしてはいたものの、国歌はありませんでした。そのため、薩摩では、早くから音楽の必要性を感じていたといわれています。そこで、明治2年、薩摩の歩兵隊長大山巖などが兵を率いて上京した際、イギリス領事館に依頼して、軍楽鼓笛隊を中心に人選した伝習生に、西洋音楽を習わせました。

2.横浜「妙香寺」を拠点に猛練習

当初は楽譜も読めず、また楽器もなく、竹や鋳物で作った間に合わせの楽器ということもあって上達せず、フェントンからもさかんに叱られました。しかし、薩摩が注文していた新しい楽器がイギリスから届くと、みちがえるようにめきめきと上達したといえます。こうして日本で最初の吹奏楽団が誕生したのでした。かつて、その練習所であった横浜の「妙香寺」の境内には、現在、日本吹奏楽指導者協会によって建立された「日本吹奏楽発祥地」という記念碑が建てられています。また、その横には、「国歌君が代発祥地」という碑も建てられています。これは、日本最初の「君が代」の曲を、薩摩の軍楽隊が演奏練習したことによるものです。

日本吹奏楽の始まりと薩摩― 2

3.日本最初の「君が代」演奏

明治3年、フェントンが「日本には国歌がないので、歌詞があれば作曲してやる」といったことから、大山巖らが相談し、薩摩琵琶曲の「蓬萊山」の一節から「君が代」の歌詞を選び、フェントンに渡しました。「君が代」は、もともと「古今和歌集」にあり、薩摩では謡曲、箏曲、薩摩琵琶曲、サムライ踊りなど身近に使われていました。フェントンはその歌詞に曲をつけ、薩摩の軍楽隊が練習し、向島での調練の際、明治天皇の前で披露しました。これが、日本最初の「君が代」で、西洋調の曲でした。しかし、当時、西洋音楽を聴きなれない日本人にとっては馴染めなかったため、明治13年、楽曲の改訂委員会がもたれ、歌詞はそのままにして日本調を取り入れた現在の「君が代」に変わりました。

4.「文化の国」薩摩

当時の指揮者は薩摩の鎌田新平や西謙蔵でした。以後、この伝習生の中から、陸・海軍軍楽隊長など、日本の吹奏楽及び西洋音楽を牽引する数々の指導者が生み出されました。薩摩と言えば「武の国」というイメージが強いですが、日本近代化の先駆けとなり、現在、世界遺産登録をめざす島津斉彬の「集成館事業」をはじめ、音楽、洋画、医学、そして国旗「日の丸」や国歌「君が代」の発祥など、薩摩は「文化の国」でもあるといえます。

島津久光の中央政界進出と薩長の対立― 1

➤ 2014.07.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

1.久光の初めての率兵上京

無位無官で藩主でもない久光が1千の兵を率い、前藩主島津斉彬の遺志である「京都守護と公武合体」を実現すべく、初めて入京したのが文久2年（1862年）4月のことであった。朝廷から京都の治安維持を任された久光は、部下である薩摩藩の攘夷過激派を伏見の寺田屋で一掃したことから、朝廷・幕府の両者の信頼を一挙に得たのである。

2.久光の中央政界進出と幕政改革

朝廷、幕府の両政権から信頼を得た久光は、その勢いをもって幕政改革を建言、その意を汲んで朝廷は江戸へ勅使を派遣、一橋慶喜を将軍後見職に、越前藩主松平慶永（春嶽）を政治総裁職に据えるなど、幕政改革が実現した。久光一行はこの勅使に随行、江戸から帰る途中、横浜の生麦村でイギリス人殺傷事件「生麦事件」を起したのである。以後、薩摩は中央政界での主導権争いと薩英戦争への対応という二つの大きな問題を抱え、その対応に苦慮するのである。

島津久光の中央政界進出と薩長の対立― 2

3.薩長の対立と「八・一八の政変」

幕政改革は成功したかにみえたが、京都では朝廷の力が大きくなったことに威を得て、尊王攘夷派の公家や勤王の志士の勢力が強大化し、討幕の機運が一層高まっていった。尊王攘夷運動の中心勢力は、薩摩藩と主導権争いをしてきた長州藩であった。薩英戦争への対応に追われ中央政治に力を向けられない薩摩に対し、京都で勢力を増した長州は、三条実美など朝廷内の攘夷派公家の勢力と組み、文久3年（1863年）8月、天皇の大和行幸を機に天皇を押し立て、一挙に討幕の事を起そうと画策した。これを事前に察知した薩摩や会津が天皇に知らせたため天皇は驚き、これを阻止するよう勅命を出したのである。孝明天皇は、攘夷思想の持ち主ではあったが、過激な攘夷には反対であり、ましてや討幕などは意中になかったのである。薩摩と会津は、天皇の命により、同年8月8日、御所の警備にあたっていた長州藩士らを排除し、長州寄りの攘夷派公家を朝議からはずし、長州藩および攘夷派公家を京都から追放することを決定、いわゆるクーデターに成功したのである。これを「八・一八の政変」と言う。以後、長州は幕末まで京都への入京が禁止となったのである。また、三条実美など7人の攘夷派公家も長州へと下った。これを「七卿落ち」という。

島津久光の中央政界進出と薩長の対立ー 3

久光と慶喜の対立による「参予会議の崩壊」

1. 久光三度目の率兵上京



生麦事件石碑



薩英戦争記念碑



島津久光像

「八・一八政変」によって、長州勢をはじめ京都から過激な攘夷派は排除されたが、これで政治が安定したわけではなかった。かえって長州は薩摩や会津への反感を募らせ、下駄に「薩賊会奸」と記し踏みつけるなど憎しみを一層増し、対立を強めていったのである。

この八・一八政変の後始末のため、久光に上京の要請が下った。久光は文久3年（1863年）9月12日、1千5百の兵を率いて上京したのである。そして11月15日、天皇から極秘に辰韓が下され、それを受けて久光は一橋慶喜、松平慶永（越前）、山内容堂（土佐）、伊達宗城（宇和島）などの諸侯による会議を提案、小松帯刀を使者にして諸侯に上京を要請したのである。

島津久光の中央政界進出と薩長の対立― 4

2.参予会議の開催と「長崎丸事件」

久光の呼びかけにより上京した4人の諸侯は、12月4日「参予」に任命された。無位無官の久光は翌年1月「従四位下左近衛権少将」の官位を授与され参予となり、2月「大隅守」も兼任、諸侯による「参予会議」が発足した。

同年2月には将軍家茂も入京参内の後、家茂は参予に任命された諸侯が幕政に参加することを認め、老中部屋への出入りを認めた。一方、長州は「八・一八政変」を不満とし、朝廷に嘆願書を提出するための使者を大坂に派遣してきていたが、久光はこれを許さず、使者を帰国させるよう主張した。このため長州はさらに怒り、薩摩藩が幕府から借用して綿花の輸送に使用していた船「長崎丸」を下関で砲撃して撃沈、薩摩は優秀な船員28人を失った。久光は激怒し、長州処分を強く主張するようになった。これを「長崎丸事件」といい、薩長の対立はますます激化していったのである。

3.久光と慶喜の対立と参予会議の崩壊

朝廷が久光の言いなりになり、参予会議の召集など主導権を久光にとられたと感じていた慶喜は、久光の動きを快とせず、当時問題となっていた横浜の鎖港問題では、慶喜自身開港の意思を持ちながら、あえて鎖港を主張、これに久光はじめ他の諸侯が反対、意見がまとまらず会議は紛糾した。これにより、久光が開国論者であるということが明るみになり、その結果久光は、天皇や朝廷からの信頼を失うはめになったのである。また、横浜問題を優先するという慶喜に対し、長州処分問題を優先しようとする久光とが対立、さらに、慶喜が久光や慶永らに対し侮辱的な言葉を発したこともあって、会議は結局分解し参予会議は失敗に終わったのである。以後、天皇や朝廷の信頼は慶喜の方に移っていくのである。一方久光は、小松帯刀と遠島生活から復帰させた西郷隆盛らに後事を託し、帰国したのである。

学所「開成所」の開設— 1

➤ 2014.10.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

1.幕府の「開成所」

幕末、ペリー来航以来、幕府は外国の文化や技術などの導入を必要とする上から、安政3年（1856年）江戸神田小川町に翻訳や辞書の発行などを主務とする洋学校「蕃書調所」を開設した。ここは外国使節との応接所にもなったが、その後、文久2年（1862年）神田一ツ橋門外に移設、名称も「洋書調書」と改められた。さらに翌年にはこれを「開成所」と改め、蘭学中心から次第に英語、仏語、独語などを加え、西洋の新しい学問研究へと進み、後の東京帝国大学の一部となった。

2.薩摩の「開成所」

薩英戦争により攘夷の不可能を知った薩摩藩でも、西洋の進んだ技術や文化を導入する機運が急速に高まり、外国語修得の必要を感じたことから、幕府の洋学所「開成所」に倣い、鹿児島城下の小川町庄内屋敷（都城屋敷）跡に、元治元年（1864年）「開成所」を開設、本格的に西洋の学問を教えたのである。薩摩では、洋学校の設立構想はすでに島津斉彬時代からあり、斉彬は石河確太郎らに命じていたが、斉彬が急死したために途絶えていたのである。

庄内屋敷は海岸に面した広い屋敷であり、学問だけでなく海陸軍の訓練場としても都合がよかったため、庄内屋敷を祇園之洲（今の石橋公園付近）にあった重富屋敷に移転させ、その跡地に建設したのであった。

学所「開成所」の開設― 2

3.開成所の優れた人物を「薩摩藩英国留学生」として派遣

この開成所教授には、斉彬の集成館事業を手がけた蘭学者の八木称平、石河確太郎らをはじめ、外部からは、英語学者の前島密（日本郵便の父）やジョン万次郎（中浜万次郎）なども招かれた。生徒は藩内から選ばれた優れた人物60～70人が学び、それぞれの等級ごとに手当も支給されていた。教科は、英語、蘭語のほか海陸軍砲術、兵法、数学、物理、医学、地理、天文学、測量術、航海術などの西洋の進んだ技術や学問の修得であった。

薩摩は慶応元年（1866年）、イギリスへ4名の使節団と15名の留学生を送りこみ、ロンドン大学などで学ばせるが、その人選にあたっては、開成所出身の優秀な人物を中心に選出したのである。しかし、この開成所も幕末の急激な世情の変化に伴う藩の軍制改革によって、軍にかかわる教科が分離し、単なる教科学習の域にとどまったため、後に藩校「造士館」に移ることになるが、薩摩藩英国留学生として派遣された人々の多くは、その後、近代日本建設のあらゆる分野でめざましい活躍をみせたのである。

明治維新を迎えることができなかった鹿児島人

➤ 2014.10.01

➤ 著者：東川 隆太郎

明治維新という大きな政治・社会変革の立役者とされる薩摩藩。新しく樹立された新政府において、数多くの鹿児島人たちが要職に就き、「万国対峙」や「四民平等」の目標に向けて活躍した。その代表が西郷隆盛や大久保利通だろう。ただ、同時期に生を受け同じ志を持ちながら、明治維新を迎えることなく亡くなった者も数多くいる。

まず万延元（1860）年、江戸城の桜田門外において大老・井伊直弼の暗殺に加わった有村雄助、次左衛門兄弟（生家は高麗町）。ふたりとも自刃している。

文久2（1862）年には、島津久光の上洛にあわせ、京都所司代など襲撃のための挙兵を計画した薩摩藩士らが、伏見の寺田屋において、鎮撫の薩摩藩士らと同士討ちとなる事件が発生する。その際、尊王の志篤い有馬新七（加治屋町にて生活）らが激闘の末亡くなった。

喜入郷の出身の伊牟田尚平は、鳥羽・伏見の戦いのきっかけになった、庄内藩らによる江戸の薩摩藩邸焼き打ちを誘導した人物。戊辰戦争でも西郷らとともに従軍するはずであったが、京都や大津で発生した辻斬り強盗の嫌疑をかけられ自刃している。維新前夜ともいえる時期のことであった。

他にも数多くの薩摩藩士らが、寺田屋事件や薩英戦争、江戸薩摩藩邸の焼き打ち、鳥羽・伏見の戦いなどで命を落としている。変革の立役者である薩摩藩にとっても、維新への道は決して平坦なものではなかった。そして時代が明治を迎えたのちも、鹿児島は西南戦争という多大な犠牲と悲劇を生んだ争いを経験するのである。

西郷隆盛と野菜生活

➤ 2014.11.04

➤ 著者：東川 隆太郎

鹿児島市喜入町にある観光農業公園グリーンファームは、様々な農業体験や滞在型の観光農園などが充実した施設。こうした施設が象徴するように現代人も農的な暮らしに憧れ、余暇のひとつとして農業に親しむひとが増えている。

実は西郷隆盛も、こうしたグリーンツーリズムの実践者のひとりであった。ただ特に江戸時代における西郷家にとって農作業は、余暇よりも生活のための食糧確保としての役割が大きかったようだ。また西郷も武士としてのお仕事がりながらの農作業に従事でゆえに苦労もあったであろう。舞台となる場所は、鹿児島市郊外の西別府にあり、現在は「西郷野屋敷跡」として公園化され親しまれている。大家族だった西郷家にとって野屋敷の存在は大きく、本宅のある加治屋町から半日くらいかけて訪れ、時には滞在もしてからいもなどを栽培していた。

ここには長期滞在できるように、6 畳、3 畳、4 畳、2 畳の田の字型の小屋があったようだ。明治6年の政変後には西郷隆盛も時間的な余裕もあり自らを居住地から「武村の吉」と称して、特に余暇を目的とした農的な暮らしを実践していた。生活の余裕もありながらの農作業ということなので、つまり鹿児島におけるグリーンツーリズムの先駆者ともいえそうだ。

野屋敷での滞在は「短くて3日、長くて1週間くらい」といわれ、西南戦争勃発まで西郷にとっては穏やかな時間を過ごした場所のひとつだったのだろう。

第一次長州征伐と西郷隆盛— 1

➤ 2014.11.26

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

1 「池田屋事件」から「禁門の変（蛤御門の変）」へ

文久3年（1863）8月の「八・一八政変」以来、京都を追われた長州藩は、薩摩や会津による策謀によるものだとして、「薩賊会奸」と称し、対立を一層強めていった。長州はその後勢力挽回のため朝廷に対し、藩主父子の無実と七卿の赦免を願ったが許されなかった。さらに翌年の元治元年6月5日、尊王攘夷派の志士たちが、京都の池田屋で新撰組に襲撃される「池田屋事件」が発生したことから、長州藩では藩論が割れたものの、過激派は強引に京都に兵を進めた。桂小五郎（木戸孝允）や高杉晋作らは反対したが、激派の来島又兵衛や久坂玄端らは同年7月19日、御所を警固していた薩摩や会津・桑名藩を主とする藩兵と衝突、「禁門の変」（蛤御門の変）が勃発した。

長州勢は蛤御門を守る会津藩兵に対し優勢であったが、乾の御門を守備していた西郷隆盛率いる薩摩藩が加勢に駆けつけて長州勢を破り、来島又兵衛は戦死した。また、鷹司邸付近では久坂玄端の隊が奮闘したが及ばず、久坂も自刃し長州勢は敗退した。戦いは1日で決したが、京の町は3日間燃え続け、公卿屋敷数十軒と民家2万8千戸が焼失し、避難民があふれた。

第一次長州征伐と西郷隆盛— 2

2 第一次長州征伐と西郷隆盛の斡旋收拾

この勢いを機に、幕府は長州藩を一気につぶそうと計画、天皇の勅命をいただき、8月2日、諸藩に対し長州征討の命を下し21藩がこれに備えた。こうした最中、8月5日には、長州藩が前年、下関砲台から外国船を無差別攻撃したことに対する報復として、英、米、仏、蘭の四国連合艦隊が下関を攻撃、約1時間後には完全に砲台は沈黙させられ、台場も占拠された。

9月下旬、長州藩征討総督に尾張藩主徳川慶勝、総督参謀に西郷隆盛が任命されたが、西郷はそれ以前、9月15日に幕臣の勝海舟と会談、「幕府はすでに国内統一の力を失っているので、雄藩諸侯が同盟して国の政治を動かすほかない」という勝の意見を聞き、薩摩藩も諸侯会議が成功しないときは、武力討幕へと方針転換するよう大久保に書簡を送っている。それゆえ西郷は長州征討に当たり、「戦わずして収める」ことをめざした。西郷は毛利一族の岩国藩と連携し、①長州藩自身の手による「禁門の変」の責任者（家老たち）の処罰、②毛利藩主父子の詫び状提出、③長州にいる5人の公卿の大宰府への移居、④山口城の取り壊し、などを条件に攻撃を中止し、事態の收拾に努め、徳川慶勝征討総督もこれを了承したのである



蛤御門

篤姫の鹿児島時代はどうだったのだろう

➤ 2014.12.01

➤ 著者：東川 隆太郎

大河ドラマの放映によって全国区の知名度を得た篤姫。徳川将軍家に嫁いでからの生活ぶりに関しては、様々な史料にのこり分かっていることも多かったが、鹿児島時代の記録は少ないとされていた。そのなかで近年史料の解析などによって、将軍家へのお興入れを前提として島津本家の養女となり、鹿児島城こと鶴丸城で過ごしていた約2ヶ月間の生活ぶりが多少なりともわかってきた。わかったのは大河ドラマ放映後のことであったため、そのことがドラマに反映されることはなかったが、鶴丸城における篤姫の生活が、城外への外出があったり習い事をしたりなどの生き生きとした日々であったようである。

篤姫の鶴丸城入りは嘉永6（1853）年6月5日で、江戸へと出発したのは8月21日のこと。これにあわせるかのように、養父である藩主島津斉彬も同時期に江戸からお国入り、鶴丸城に入っている。季節は夏ということもあり、史料によると、生家の今和泉島津家から頻繁にスイカの差し入れが行われている。季節物のスイカは美味であっただろう。また、将軍家へのお興し入れに必要な教養として、お香を習っている。外出は頻繁ではなかったが、別邸のある磯に斉彬に会うために出かけたり、またもうひとつの別邸のある玉里にも出向いたりしている。このように篤姫は、鹿児島での最後の日々を鶴丸城で過ごし、江戸へと向かった。

大久保利通の先祖と家族の物語

➤ 2015.01.01

➤ 著者：東川 隆太郎

○大久保利通は家族にも物語がある

大久保利通はもちろん物語のある偉人。実はその家族にも十分な物語があった。

その代表格が母フクの父・祖父の皆吉鳳徳。藩医も努める知識人で、オランダ語はもちろん、海外事情にも精通し、文政6（1823）年には、仲間とともに三本マストの洋式帆船「伊呂波丸」の建造に成功するなどマルチな才能を発揮していた。ただ、文化5（1808）年には、藩のお家騒動のひとつ「秩父崩れ」において謹慎の罪を受け、藩医の職も辞するといった苦労の時期もあった。鹿児島城下においては珍しく牛を飼育し、しかもその牛に乗り城下を回遊していた。また自身の死に際しては、医者でありながら薬は効かないとして、各地の湧水を取り寄せて飲用するなどの行動も伝わっている。なるほど変わり者に間違いない。そのような祖父の影響を大久保はどれほど受けたかわからないが、背の高さはしっかりと受け継いでいる。ちなみに大久保利通は180センチほどの身長があったという。皆吉の身長は、「力士を見るが如く」であったといわれているので、まさに隔世遺伝といえそう。

次は父親である大久保利世。藩での役職は琉球館付役といって、薩摩藩と交流のあった琉球王国の大使館でもある琉球館務めだった。当時琉球王国といえば外国でもあり、ここで取り扱われる事柄は機密事項も多く、また大使館ということもあって人々の出入りには厳しい制限があった。このような特別な環境の場所には官舎があって、大久保は父が在職中に、この環境で暮らしていたとの記録もある。こうした多彩な家族の物語が、同じく明治維新に尽力した西郷隆盛とは異なる性格にも影響したといえるのではないだろうか。

外国人と小松帯刀の交流

➤ 2015.02.01

➤ 著者：東川 隆太郎

「私の知っている日本人の中で、一番魅力ある人物」。幕末から明治にかけて日本に滞在した通訳官のアーネスト・サトウは、小松帯刀をこのように評している。サトウは、様々な日本人とも接点があり、薩英戦争の際には海上のイギリス船に乗っており、戦闘を目撃した人物である。

さて、他にもつながりの深い外国人に、長崎で貿易業を担っていたトーマス・グラバーがいる。小松は藩の家老として陸軍掛、銃薬方掛、台場掛も兼務し、グラバーは薩摩藩の軍艦や汽船・武器の購入を請け負う立場にあったので、親密になったのは当然ともいえる。明治元（1868）年には、江戸末期に五代友厚の意見であった洋式の修船施設の建設をグラバーとの共同出資という形で、長崎郊外の小菅に完成させるに至った。これが現在「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成遺産のひとつとして世界文化遺産の候補になっている「小菅修船場」であり、「算盤ドック」と呼ばれる海に向かって傾斜したレールや船の巻き上げのための建物が保存されている。

ただ、この修船場の開所式に小松は参加することができなかった。それは病気のためである。この頃から仕事にも支障を来すほどに病状は悪化しており、鹿児島市郊外の原良町に石垣と庭の一部が保存されている別邸で療養するなどしていたが、名医の治療を受けるために大阪へと向かう。その名医は大阪府医学校のオランダ人ボードインであり、様々な治療を小松に施した。しかし、明治3（1870）年36歳で大阪において小松は亡くなる。歴史にもしもはないが、魅力的な人物と評されただけに小松には長生きして外国人と接して欲しかったと思うのは私だけだろうか。

若者よ、西洋に学べ 薩摩藩英国留学生 (その1) — 1

➤ 2015.02.24

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

○若者たちの船出



若き薩摩の群像

薩英戦争によって攘夷の不可能を知るとともに、西洋の進んだ文化や技術に驚かされた薩摩は、イギリスとの和睦交渉に際し、軍艦購入の斡旋と操船技術等の伝授などを申し入れ、慶応元年（1865年）3月、串木野郷羽島浦から藩の優秀な若者たち19名をイギリスへ送り込んだ。日本に新しい文化の息吹を吹き込み、近代日本の礎となる若者たちの船出であった。

○命がけの海外留学



島津斉彬公像

留学生派遣の計画は、すでに島津斉彬の構想の一つとして英・米・仏への派遣計画があったが、斉彬の急逝により実現されずにいた。鎖国時代の密航は勿論御法度で、命がけのものであった。海外渡航が許可されたのは薩藩留学生派遣の翌年で、慶応2年（1866年）のことである。このときも、渡航は学術や商業、貿易に限定されていた。薩摩藩が留学生を鹿児島近辺からでなく、甕島や大島の警備と称して遠くの羽島浦から出港させたのも、こうした事情によるものであった。

若者よ、西洋に学べ 薩摩藩英国留学生 (その1) — 2

○五代友厚の上申書



五代友厚銅像

留学生派遣を具体的に上申したのは、島津斉彬の側近として登用されていた石河確太郎や五代友厚であった。特に、長崎の英国商人グラバーと親しく交際し、国際情報にも通じていた五代は、薩英戦争で松木弘安（寺島宗則）とともに捕虜となり、一時身を隠していたことを藩に謝罪した上で、海外交易や機械導入により藩が得る利潤獲得の方法について、身を捨てる覚悟で上申、また、留学生派遣では、藩開成所の優秀な人物を中心に、その人選の仕方まで細部にわたって上申している。

○攘夷思想を持った者も敢えて派遣

藩は、五代の上申書に基づき、藩の大目付の新納久脩を団長に、五代、松木、通詞の堀壮次郎（孝之）ら四人の使節団と、開成所学頭の町田久成ら16人の留学生を決定した。ところが、羽島へ出発するという前日になって、畠山良之助（義成）、高橋要、島津織之助の三人が辞退を申し出た。三人はもともと攘夷思想の持ち主であったが、将来、藩の指導者となるべき家柄の人物であったことから、その意識変革のために意図して選出された者たちであった。国父である島津久光が直々に三人を説得したが、畠山だけは説得に応じたものの他の二人は強く辞退したため、これに代わる者として急きょ名越平馬と村橋直衛（久成）が参加することとなった。

島津斉彬の民政と勸業

➤ 2015.03.01

➤ 著者：東川 隆太郎

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の世界文化遺産登録へ向けた話題がいよいよの期待をもって広がっている。鹿児島県における構成資産は、島津斉彬の集成館事業関連が中心である。島津斉彬の功績といえば、まずは造船・大砲鑄造・紡績などを担った集成館事業が真っ先に浮かぶ。しかし、島津斉彬の功績はこうした日本の近代化に向けた動きにとどまらず、薩摩藩の経済や農業にも多大な影響を与える事業を行っている点にある。今回はあえてそれらをご紹介します。

まず、嘉永4（1851）年の藩主就任後すぐに着手したのが、常平倉の設置である。これは、藩の費用で米価が安いときに米を買入れておき、米価が高いときに安く放出するための米の倉庫である。これは藩内の米価を安定させ、藩民の生活を不安定にしないことを目的としていた。

また新作物の試植も命じている。鹿児島では年に二回は収穫できる稲や粟、三回は収穫できる蕎麦などを奨励した。ほかにもサツマイモの一種であるオランダ芋や台湾種のサトウキビなども試しに植えさせるなど農業にも力を入れている。

漁業面では、桜島で昆布の養殖を試みたり、甕島のナマコ池において長崎の大村湾からナマコを移入させて産品にしたりすることも命じている。

最後に、これらを流通させる人材の育成にも尽力し、士風を正すことを目的とした質素儉約の達しも出している。まだまだあるが、今回はここまで。やっぱり、島津斉彬はすごいお殿様であった。

幼少期から才能のあふれていた五代友厚

➤ 2015.04.24

➤ 著者：東川 隆太郎

今年、慶応元年に薩摩藩が英国に留学生を派遣してから150年目にあたる。その派遣に際して藩に進言し、使節団としても活躍した人物が五代友厚である。帰国後の功績は、特に大阪において絶大で、大阪商工会議所の初代会頭を務めたりしながら商都大阪の発展に寄与した。そのような五代友厚は幼少期から才能にあふれていたという。それはまず父・秀堯の影響が大きいのではないか。父は江戸後期の代表的な地誌「三国名勝図会」の編者でもある学者であった。このような家庭環境ゆえに当時として貴重な世界地図に触れることもできた。そして二枚を模写して、一枚は藩主島津斉彬に献上し、一枚は自分の書斎に掲げていたという。斉彬は五代の才能をよく理解していたようで、通称の「才助」を命名している。ちなみに号は松陰で、自宅周辺に松が多かったためという。そのような五代にとって大きな転換を迎える年が嘉永6年（1853年）である。ひとつは父が亡くなったことで、もうひとつがペリーの浦賀来航であった。（続く）

英国留学前に外国に出かけていた五代友厚

➤ 2015.05.01

➤ 著者：東川 隆太郎

学問をする環境にあった家庭の柱である父を失い、日本が外圧を大きく感じるようになるペリーの浦賀来航があった嘉永6年（1853年）の翌年、五代は藩に郡方書役として出仕する。それから3年後に長崎への遊学が命じられ、幕府が開設した長崎海軍伝習所で航海術を学ぶことになる。こうした経験から文久2年（1862年）には藩の汽船購入のためにイギリス商人トーマスグラバーとともに上海に渡っている。この際購入した汽船は鹿児島に回船している。またこの年には幕府の千歳丸に水夫として乗船し、二度目の上海を経験している。千歳丸には長州藩士の高杉晋作も同船していた。五代は英国渡航前にアジアの貿易拠点であり、またガス灯や電線が整備された西欧諸国の縮図のような上海の市況視察も行っていたことになる。こうした国際感覚が留学生の引率に生かされたことは言うまでもないが、留学前から五代の人生は当時の薩摩藩士と比較するならば、かなりドラマチックであったと表現できよう。

西洋の近代化に驚嘆 薩摩藩英国留学生 (その2) — 1

➤ 2015.06.01

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○羽島浦（串木野）から国禁を犯しての旅立ち

藩の正式な留学生として選ばれたのは16人であった。これに使節団として団長の新納久脩をはじめ、渡航経験のある松木弘安（寺島宗則）、五代友厚、通詩（通訳）の堀孝之の4人が加わり、合計20人が渡英することになった。慶応元年（1865年）1月20日（旧暦）、藩外にいた松木、五代、堀の3人を除く17人は鹿児島を立ち、伊集院苗代川で一泊、翌日羽島浦の藤崎龍助宅に到着した。

一行はこの羽島浦で、長崎から回航してくるグラバー商会所属の「オースタライエン号」を2か月も待つのであった。その間、学頭の町田久成の弟の町田猛彦が、留学という重荷に耐えかねてか変死し、結局、留学生は15人になった。最年少の磯永彦輔（長沢鼎）はわずか13歳であった。

○船酔いと食事に閉口

同年3月22日、合流した使節団も含め、一行はやっと羽島浦を出発、髷を切り、刀を箱に収め、洋服に着替えて未知の世界へと旅立ったのである。道中の案内役はグラバー商会の番頭役をつとめるライル・ホームであった。一行は藩の正式な派遣であるため船中での待遇は最上級であったが、船酔いの上に、初めて口にする西洋料理であっただけに「食べられるものといえば橙と米だけ」と皆閉口したようである。

西洋の近代化に驚嘆 薩摩藩英国留学生 (その2) — 2

○見るものすべてが驚き

香港で、より大きな汽船に乗り換えたが、一行は香港の夜景のすばらしさに眼を奪われた。街の光と建造物の大きさに驚いたという。シンガポールでは、西洋人たちの人目をはばかりぬ別れの接吻に驚き、暑い赤道航行中にアイスクリームを食べられることや、パイナップルを「松かさ果物」と呼び珍しがり、ラクダを初めて見るなど、接するもの目にするものすべてが新鮮に映った。また、当時は建設中であったスエズ運河を見学しその大規模な工事に驚き、スエズからアレクサンドリアまでは初めて汽車に乗り、その速さに驚いた。ここからさらに船で地中海へと進み、イタリア南部にあるマルタ島に上陸、ここにはイギリスの重要な近代軍事施設をはじめ、西洋の最も近代的な建物や兵器などを見学、特に、地中海周辺の古代兵器などを集めた博物館も訪れ、日本とは比べものにならないほど昔から発展していたことに驚くとともに、攘夷の空しさをここで真に実感したという。

○「留学生派遣より藩の上層部の渡欧が先決」と五代は述懐

五代友厚は、留学生派遣を強く上申した一人であるが、マルタ島までの船旅を終えたところで、「留学生の近代化に対する認識を変えさせるという初期の目的は、すでにここまでの旅で達成できた」とし、むしろ、藩を将来引っ張っていく上層部の人間の意識を変えさせることが先決であったと、反省の手紙を藩に送っている。藩指導部の意識変革こそが、近代化への近道であると五代は実感したのである。

こうした数々のカルチャーショックをうけながら、一行は5月28日（旧暦）、2か月余りの船旅を経て、イギリス南部のサウサンプトン港に到着した。ここからロンドンまでは汽車で行き、ロンドン駅で出迎えてくれたのは、日本在住のトーマス・グラバーの兄、ジェームス・グラバーであった。一行はケンジントンホテルに宿泊した。

すでにヨーロッパを体験していた寺島宗則

➤ 2015.06.08

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応元年（1865年）の薩摩藩英国留学生のほとんどが、この時初めての国外旅行であった。しかし、実は五代友厚と寺島宗則はすでに国外を経験していた。特に寺島宗則は、ヨーロッパの国々も歴訪していて、語学はもとより、知識も豊富に有した上での留学生引率を行っていた。それだけに寺島の引率は、まさに適任であったといえる。

さて、寺島宗則の一回目の渡欧はどのようなものだったのだろうか。それは薩摩藩による密航ではなく、正式に徳川幕府の使節の一員としての渡欧であり、時は文久元年（1861年）のことであった。この使節派遣の目的は、江戸・大坂などの開市・開港の延期と日露国境の画定交渉がメインであった。寺島宗則は通訳として参加を認められていた。元々青年期より長崎遊学などでオランダ語に精通しており、集成館事業にも深く関与していた。万延元年（1860年）には幕府の蕃書調所教授手伝にもなり、福沢諭吉らとともに渡欧する。この時イギリスに限らず、オランダ、フランス、ドイツ、ロシアを訪問した経験は、確実に後の薩摩藩留学生派遣に役立ったであろう。また明治政府においても外務官僚として条約交渉で活躍することになる。

英国留学生の羽島までの道をたどる

➤ 2015.07.01

➤ 著者：東川 隆太郎

英国留学生の話題のなかで、知られているようで意外と知られていないのが、鹿児島城下から、出港した串木野の羽島までの行程ではないだろうか。まず、鹿児島城下から出発の17名に藩命が下ったのは、元治2年（1865年）正月18日。ただ辞令に記されているのは表向きの理由で、甕島と奄美大島への出張ということであった。五代友厚など3名は長崎から香港へと向かう船で向かい、串木野の羽島沖にて合流との手はずになっていた。

鹿児島出発は20日。この日は天気もよく、薩摩藩の主要街道でもある出水筋を早朝6時に出発し、まず現在の鹿児島市石谷町にあった楠公社に向かった。ここは後醍醐天皇の側近であった楠木正成を祭る神社で、まさに尊王思想の象徴ともいえる神社であるが、現存していない。ちなみに石谷は留学生の町田兄弟の領地でもある。それから伊集院においては島津義弘公を祭る妙円寺に参詣している。その後、薩摩焼の窯元でもある苗代川こと現在の美山に到着して、ここで一日目が終わる。

翌日21日は朝8時頃に苗代川を出発し、昼頃に市来湊に到着する。当時の市来湊は宿場としても栄えていた。留学生たちは、ここから船にて羽島に向かっている。

これが意外と知られていない留学生の羽島までの行程である。

留学生は英国をめざして

➤ 2015.08.01

➤ 著者：東川 隆太郎

1865年（元治2年）4月17日、羽島（現在のいちき串木野市羽島）を長崎から香港へと向かう蒸気船「オースタライエン号」で出航した留学生及び引率者19名は、異国行きを前に様々な思いを秘めながら南下していた。西欧諸国行きが初めてではない松木弘安こと寺島宗則は、留学生らに数々の諸事情を詳細に伝えていたことであろう。留学生らは、武士の魂でもある刀の所持は許されず、船内において箱に仕舞うことになっていた。また、髷も海外では異様であることから断髪することになっていた。武士として相当の覚悟が必要とされる船出であったことが想像される。

そのような中、4月21日の夕方、海外の寄港地としては初めてとなる香港に到着した。街にはまるで「星が雨降る様な光」を放つガス灯と西欧風の建造物が立ち並んでいた。こうした驚きは、次の寄港地であるシンガポールやムンバイなどでも連続していくことになる。ただ、驚くばかりでなく留学生らは西欧の植民地となったアジアの地域で、アジアの人々が西欧人にさげすまされる様子も目の当たりにする。英国への旅は留学生にとって、西欧に「学ぶ」だけでなく、これからの「日本」の在り方を熟考させられる機会にもなった。

国立博物館の創始者・町田久成は石谷領主

➤ 2015.09.01

➤ 著者：東川 隆太郎

留学生の選抜には、藩の洋学校である開成所における成績などのほか身分も考慮された。それら両方を備えた人物のひとりが町田久成だった。彼は開成所においては学頭でもあり、また石谷村（現在の鹿児島市石谷町）の領主でもあった。町田氏は島津氏の分家でもあり、代々家臣として仕えた。戦国期の町田家の当主・久倍は伊集院の地頭に任ぜられ、石谷村も領することになる。石谷村の石高は700石余りであったが、久成が活躍した幕末期には茶の生産が豊富な地域であったという。

さて肝心の町田久成は、26歳の若さで藩の大目付に就くなどした人物で、英国留学の経験は帰国後に博物館設立という形でも発揮される。明治政府において内務卿を勤めていた大久保利通への建白書には、博物館のみならず植物園や動物園の併設まで記されている。他にも外務関係で活躍することになるが、1889年（明治22年）に突然明治政府高官の職を辞し、剃髪して全国行脚を行う修業の世界に身を置くことになった。

最後には滋賀県の三井寺にて仏門に入り、僧侶として60歳の生涯を終えることになる。領主から中央政界での活躍、そして僧侶へと身を転じた人生は波乱万丈に映るが、領地であった石谷の一族の墓は、今も茶畑に囲まれる丘陵にあって静かに守られている。

日本近代化に貢献した「薩摩藩英国留学生」 (その3) — 1

➤ 2015.09.03

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○ロンドン大学で学んだ留学生

西欧の進んだ文化や技術を自分たちの目で確かめ学び取ろうと、イギリスへ出発した使節団及び留学生一行19名は、船旅の途中様々なカルチャーショックを受けながら、約2か月後の慶応元年（1865年）5月28日、イギリスのサウザンプトンに到着、そこから汽車にてロンドンへ向かい、長崎のイギリス商人トーマス・グラバーの兄であるジェームス・グラバーの出迎えを受けた。

使節団（新納久脩）、五代友厚、松本弘安、堀孝之）は紡績機械、銃砲、艦船などの交易及び外交面の交渉に奔走。一方留学生は語学合宿後、オリファント卿やロンドン大学のウィリアムソン教授らの計らいによりロンドン大学へ入学、13歳の長沢鼎だけは大学に入れず、グラバーの実家アバディーン（スコットランド）へ引き取られ、地元の中学校で最優秀の成績を修めた。留学生が驚いたことには、国内で最も強硬に尊王攘夷を唱えていた長州藩の留学生と出会ったことであった。

日本近代化に貢献した「薩摩藩英国留学生」 (その3) — 2

○西欧の進んだ産業・経済の発展に驚く

一行は大学で学ぶ学業のかたわら、イギリス国内の進んだ産業技術を肌で感ずべくイギリス各地を精力的に廻り、五代友厚（大阪商法会議所初代会頭）らはマンチェスターで紡績機械を、バーミンガムで小銃数千挺を購入契約、モンブラン伯爵とは商社設立の契約などを進め、薩英戦争後の集成館事業再興に大きく貢献した。また、松木弘安（後の外務卿、寺島宗則）は英外相と交渉、当時の英国の対日政策を幕府寄りから薩摩寄りに方向転換させるなど、外交上大きな成果を挙げた。

○日本の近代化に貢献した留学生たち

日本国内では薩長同盟が結ばれ、まさに幕末動乱の最中で、薩摩藩においては軍事費の増大に加え、第二次留学生を米国へ派遣せねばならなかった。そのため留学1年後には藩からの送金も途絶え、多くは帰国せざるを得なくなった。その間、留学生は個々に欧州諸国を視察する者もいたが、大半は慶応3年（1867年）までに帰国した。慶応2年、一足先に松木弘安とともに帰国した村橋久成は、戊辰戦争、函館戦争に従軍後、北海道にビール工場を誘致したが（札幌麦酒醸造所。現サッポロビール）、晩年は不遇で明治25年神戸にて行き倒れとなって発見された。使節団長であった新納は帰藩後家老、後に大島島司となり最後まで郷里薩摩のために尽くした。また、留学生塾頭の町田久成は、内務卿の大久保利通に仕え学術的に優れており、初代東京帝国博物館長（のちの東京国立博物館）となった。

日本近代化に貢献した「薩摩藩英国留学生」 (その3) — 3

○渡米し世界の葡萄王となった長沢鼎

慶応3年(1867年)、森有礼、鮫島尚信、畠山義成、松村淳蔵、吉田清成、長沢鼎の6人は、アメリカに渡りハリスの営むブロクトンのコロニーで共同生活(ブドウ園)をしていたが、森と鮫島は翌年の明治元年帰国。畠山、吉田、松村は大学に学び、畠山と吉田は明治4年(1871年)に、松村は明治6年(1873年)に帰国した。一人残された長沢は明治8年(1875年)、カリフォルニアのサンタローザに移住、広大な敷地と多くの使用人を使い「葡萄王」となって米国に永住した。レーガンアメリカ大統領は来日した際、国会演説の中で、「長沢鼎は米国の生活を豊かにした。日本とアメリカの架け橋となった人物」と称賛した。

森有礼は駐米初代公使、一橋大学の前身商法講習所を創立、のちに初代文部大臣となったが、明治憲法発布記念式典当日暗殺された。鮫島尚信は寺島外務卿のもとで初代ヨーロッパ公使となり欧州交官の第1人者といわれたが、激務がたたなりぱりの大使館執務室で死亡、吉田清成は証券・銀行などの経済専門外交官となり日本外債発行に貢献。畠山義成は帰国後教育制度の改革にかかわり東京大学の前身である東京開成学校の初代校長となった。また、松村淳蔵は帰国後海軍兵学校校長となり、日本海軍の創建に貢献した。

イギリスからフランスへ渡った田中盛明と中村博愛は、帰国後、田中は日本の鉱山開発の第1人者として、生野銀山の鉱山長となり、中村はヨーロッパ各国の駐在外交官として活躍した。

カルフォルニアでも鹿児島弁を話した長沢鼎

➤ 2015.10.01

➤ 著者：東川 隆太郎

薩摩藩英国留学生のなかでも最年少で参加した磯長彦輔こと長沢鼎が日本中で知られることになったのは昭和58年のことだった。当時のアメリカ大統領のレーガン氏が来日した際、日米友好のつながりの一例として国会の演説において長沢鼎のことを紹介したことによるものだ。長沢鼎は日本に帰国はしているが、留学生で唯一国外となるアメリカで業績を残し、アメリカで生涯を送っている。そんな長沢は留学時に最年少の13歳であっただけに、語学や学問の吸収も著しく、スコットランドの中学校では首席の成績であったという。宗教家ハリスのもとでキリスト教を学び、その後も同行してカルフォルニアにおいてぶどう園を開墾することになる。そこではぶどう酒の製造にも着手し、農園のある地名から名づけられた「ファウンテングローブワイン」は、ヨーロッパや日本にも輸出された。従業員も300人はいた長沢だが、自身は生涯独身を通し、広大な邸宅で閑静な生活を送った。ただ、話す言葉は、日本語だと鹿児島弁であったようだ。ぶどうが実るカルフォルニアに「よかよ」などの言葉が響いたことを想像すると楽しい。

長沢鼎の秀才ぶりをご先祖の遺伝子？

➤ 2015.11.01

➤ 著者：東川 隆太郎

最年少での英国行きが命じられた長沢鼎は、幼少の腕白さも伝わっているが、イギリスの北部アバディーン 학교に入学すると、英語読解や地理、歴史などにおいて優秀な成績を修めている。そうした才能は、もちろん本人の努力も背景にあるだろうが、つい先祖や家族はどのような方々であったのだろうかと考えてしまう。

さて長沢鼎の本名は磯永彦輔であり、この磯永家は薩摩藩ではいわゆる研究者の家柄であった。まず彦輔の才能のルーツにあたると考えられる人物に磯永周英がいる。周英が活躍したのは、享保年間からで、天文暦学を研究する人物として薩摩のみならず、江戸や長崎でも知られていた。その知識は、薩摩藩が安永8年（1779年）に設立した天文観測所「明時館」で発揮されることになり、ここでの研究から「薩摩暦」が生まれることになる。

さらに周英の子である周経は天文に限らず地理にも長け、「天文図略説」や「円球万国地海全図」の編纂にも関わっている。また彦輔の父周徳は、島津斉彬の集成館事業にも関わるなどして活躍した。

このように代々活躍した研究者としての家系もあるだろうが、やはり長沢鼎自身の努力もあってこそその後の活躍であったろう。

村橋久成は上級武士（大身分）

➤ 2015.12.01

➤ 著者：東川 隆太郎

英国へ向かう留学生は、様々な理由から選抜されている。ひとつは藩の洋学校であった開成所において優秀な成績を修めていること。それから当時としては普通の考えであった「攘夷」論を唱えている者。これは海外を直接触れてもらうことで、その考えを転換させる目的もあった。さらに選抜の上で重要視されたのが「身分」であった。つまり家柄のよさも選考する際には考慮された。町田久成の出た町田家も領地持ちである「一所持」であり、引率者の新納久脩も同様であった。

さて留学生として追加選抜されたのが村橋久成である。後に北海道開拓に従事し、サッポロビールの基礎を築くという功績からすると最初から選抜されてもおかしくなさそうだが、実は村橋が選ばれたのは欠員が出たためであった。

その村橋家は、上級武士（大身分）に分類される「寄合並」であり、島津家一門の加治木島津家の分家にあたる家柄だった。鹿児島城下における屋敷地は、現在の今給黎病院別館（長田町）にあったとされている。才能を見込まれての留学も、家の名を背負っての留学も同じく大変なことであつたろう。写真に残る丹精な顔立ちを見ながらそう思うことである。

近代的機械を備えた石造洋風建築 “集成館機械工場” — 1

➤ 2015.12.02

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○世界文化遺産登録

この度、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は8県11市の23の構成資産からなり、そのうちの3資産が鹿児島市にある。日本初の近代工業施設・旧集成館（反射炉跡、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館を含む）と関吉の疎水溝、寺山炭窯跡の3つである。今回は、旧集成館機械工場建設の経緯やその特徴を取り上げる。

○斉彬以後の集成館事業

文久3（1863）年の薩英戦争でイギリスの圧倒的な軍事力・科学技術を思い知らされた薩摩は、その和平交渉の過程においてイギリス側の条件を承諾する一方で、軍事力強化のための軍艦購入を打診、了解を得た。これによって西欧の文化や科学技術導入の動きが加速され、元治元（1864）年6月には洋学校「開成所」が開設され、翌元治2（1865）年3月には、19名の使節や留学生がイギリスに派遣された。これらは、全て斉彬が富国強兵を図るために起こした集成館事業をはじめとする開明的な諸施策の一部であり、ようやく斉彬の先進性に気づいた薩摩では、島津久光・忠義親子によって集成館事業の再建に着手した。

近代的機械を備えた石造洋風建築 “集成館機械工場” — 2

○集成館事業の再興～機械工場（現：尚古集成館）の建設

集成館事業の再興に際して、まず着手されたのが機械工場である。元治元（1864）年10月、反射炉の建設などに携わった竹下清右衛門が責任者になり、金属加工・蒸気機関等に関する技術習得のため長崎製鉄所に派遣されていた波江野次兵衛や同所技術者の本庄寛次郎を招聘して、日本で初めての洋風石造工場の建築に取りかかった。竹下はこれより3年前の文久元（1861）年12月に、長崎製鉄所に導入されているスチームハンマー（金属加工用プレス機）などと同様の機械をオランダから購入するよう家老・小松帯刀に訴えている。元治2（1865）年1月には、長崎製鉄所に注文していた工作機械が届き、4月には25馬力の蒸気機関やスチームハンマーなどを備えた洋式機械工場が操業を始めた。

○ストーンホーム

建物は鹿児島で古くから使用されていた溶結凝灰岩が用いられており、当初から「ストーンホーム」と呼ばれ、イギリス人技師が建設に携わったのではないかとの説があった。しかし、構造の基礎部分に神社建築によく見られる亀腹石が使われていることや、屋根の構造にトラス構造（三角形を基本とする構造体）が取り入れられているものの、屋根を支える方杖と呼ばれる斜めの柱と全体を支える梁の大きさが本来の寸法と逆になっているなど、洋風建築に関する知識が乏しい面がうかがえる。これは、建設に当たった竹下らが長崎製鉄所の建物や書籍などを参考にして独自に工夫しながら取り組んだからではないかと考えられる。

近代的機械を備えた石造洋風建築 “集成館機械工場” — 3

○外国製の機械導入

機械工場では、オランダやイギリス製の蒸気機関や工作機械が使用されていた。オランダ製（Nederlandsche Stoom Boot Maatschappij：オランダ汽船会社）の形削盤（尚古集成館蔵・重要文化財）や押切機、イギリス製（DRURY & WALKER BROE 社）の旋盤などが使用されていたが、導入時期については明確でない。

ただ、オランダ製の形削盤が1863年製であること、文久2（1862）年幕府の遣欧使節団に参加した松木弘安（のちの寺島宗則）が蒸気船や機械類購入の藩命を受けていたものの短期間の滞在で不可能なため、帰国していた長崎製鉄所のオランダ人技師ハルデスを名代にして購入を依頼していたこと、また文久初めに竹下がオランダ製機械の導入を訴えていたことなどから考えると、薩摩藩が薩英戦争前の文久の初めにはすでに機械工場建設の計画を決定していた可能性があることが指摘されている。

かつては攘夷論者だった畠山義成

➤ 2016.01.01

➤ 著者：東川 隆太郎

留学生のすべてが始めから英国行きに前向きだった訳ではない。特に外国に対して斜めな考えを示す人物もなかにはいた。そのひとりが畠山義成である。出発に際して串木野羽島でしたためた歌に、その気持ちが表現されている。「かかる世にかかる旅路の幾度かあらんも国の為とこそ知れ」。まさに国のため、主君の命ならば、という思いだったのであろう。

しかし、畠山は実際に西欧に触れ、大きく考えを変えるようになる。なぜ分かるかという、畠山は英国のみならず米国にも渡り、明治元（1868）年にはラトガース・カレッジに入学して法律や政治、社会科学などを勉強しているからだ。攘夷論を唱えていた人物とは思えない行動である。それだけに海外で得た刺激が相当のものであったことが想像される。

明治4年（1872年）、岩倉全権大使の随員辞令を受け、外交関係で活躍し、翌年帰国する。その後の功績は教育界でのものに集中し、現在の東京大学の前身である東京開成学校の初代校長に就任するなどしている。ただ、同じく留学し教育関係で活躍した森有礼とは、友情こそ失うものではなかったが、教育に関しては相いれないこともあったという。

ドラマあふれる人生を送った森有礼

➤ 2016.02.03

➤ 著者：東川 隆太郎

薩摩藩英国留学生の面々は、どの人物もドラマチックな人生を送っているが、中でも森有礼の人生はトップクラスに興味深い。帰国後の経歴を述べてみる。

明治元年（1868年）、イギリスの後渡ったアメリカから帰国した森は、明治政府の徴士、外国官権判事を務める。そこで廃刀論を建議したが、時期尚早だったのか士族層から抵抗があり辞職するに至った。鹿児島に帰郷してからは、現在の冷水町にあった興国寺跡で英学を教える日々を過ごす。しかし海外経験の実績もあり、再び明治政府で外務関係の要職に就く。その間に福沢諭吉らと自由民権運動の思想団体「明六社」を設立するが、政府によって解散に追い込まれている。明治18年（1885年）には伊藤博文内閣で初代文部大臣になるが、明治22年（1889年）の大日本帝国憲法発布の日に暗殺される。まさしく波乱万丈との表現があまりにもふさわしすぎる人生といえる。

鹿児島出身ではないふたりの物語

➤ 2016.03.01

➤ 著者：東川 隆太郎

薩摩藩が費用を賄い、幕府などにも秘密裡に出航した英国留学生。実は、そのなかにふたりだけ薩摩藩以外の出身の人物がいる。ひとり堀孝之で長崎の出身である。堀は留学生というよりは通訳として英国に行くことになった。堀家は元来長崎において通詞を職業とする家柄で、孝之も五代友厚や松木弘安とともに長崎から串木野の羽島に向かって合流している。英語が堪能ではなかった留学生らにとって、通訳は欠かさせない存在であり、道中の語学学習に大きく寄与したことであろう。英国から帰国後は、五代友厚のもとで右腕といえるほどの活躍をすることになる。

もうひとり高見弥一である。この人物は土佐藩の出身で、脱藩して薩摩藩入りしている。脱藩のきっかけになった事件は、坂本龍馬も所属していた土佐勤王党のひとりとして、党にとって厄介な存在だった藩の要職・吉田東洋を暗殺するというものであった。事件後、土佐藩に留まれなくなり、当時は大石団蔵を名乗っていたが、脱藩し名前も変えて薩摩藩で生活することになった。帰国後の高見弥一は、それまでの波乱に満ちた人生ではなく、鹿児島の造士館で教員として後進の育成にあたる堅実な生活を送った。

薩長対立から「薩長同盟」締結への歩み（前編） — 1

➤ 2016.03.04

➤ 著者：福田 賢治

（著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏）

○今年は「薩長同盟」締結150周年

幕末、中央政界において主導権争いを演じ、対立していた薩摩と長州が互いに歩み寄り、討幕へと突き進む契機となったのが薩長同盟であった。

薩長同盟が締結されたのは、慶応2年（1866年）1月21日のことで、今年はちょうど150周年にあたる。

○寛大な措置で収めた西郷の「第一次長州征討」

長州は、元治元年（1864年）7月、「禁門の変（蛤御門の変）」を起こし、御所を守る薩摩や会津の軍勢に敗れた。幕府はこれを機に第一次長州征討令を出し、諸藩36藩を動員、尾張の徳川慶勝を征討総督に、西郷隆盛を参謀長に任命した。おりしも長州は、前年下関砲台から外国船を無差別砲撃したことに対する報復として、英・米・仏・蘭の四国艦隊から攻撃を受け、賠償金300万ドルを要求されていたこともあって、西郷は「国内の騒乱は外国勢力の侵攻助長につながる」と懸念。また、勝海舟との会談による助言等も考慮し、寛大な措置により、戦わずして長州問題を収める方策をとった。そのため、西郷は、長州藩自らが「禁門の変」を主導した家老たちを処分することによって事態收拾を図り、長州が匿っていた攘夷派公家の五卿を大宰府へ移し保護することで決着させた。こうした西郷の寛大な措置をきっかけとして、長州と薩摩の間に融和への気運が生じてきた。

薩長対立から「薩長同盟」締結への歩み（前編） — 2

○坂本龍馬と中岡慎太郎の薩長同盟への関与

一方、坂本龍馬は海軍奉行となった勝海舟の下で、「神戸海軍操練所」の塾頭を務めていたが、池田屋事件の折、新選組が斬り込んだ際、浪士の中に海軍操練所の塾生がいたことから、勝は責任を問われて海軍奉行を罷免され、慶応元年（1865年）3月、神戸海軍操練所も閉鎖された。勝は龍馬や塾生など行く宛てのない者の世話を西郷に依頼。家老の小松帯刀は龍馬ら塾生を大阪の薩摩藩邸に引き取り保護した。

同年の5月1日、西郷と小松は龍馬らを伴い鹿児島へ帰国、龍馬は西郷宅や小松別邸などで過ごしたが、この間に薩摩藩の要人たちと会談、長州藩との和解を呼びかけた後、16日には鹿児島を立ち、熊本の横井小楠や大宰府の三条実美を訪問、近いうちに西郷が大宰府を訪問することを告げ、さらに下関に行き木戸孝允に西郷との会談を要請した。龍馬が鹿児島を出立した後、土佐藩を脱藩して以来、七卿（後に五卿）の警護役をしていた中岡慎太郎は、同僚の土方久元（土佐出身）とともに吉井幸輔（友実）に連れられて鹿児島に入り、島津久光に拝謁して薩長和解の必要を説くと同時に、西郷には上京の際、下関に立ち寄り、木戸と会談するという約束を取り付けた。

薩長同盟前夜 その1 犬猿の仲の両藩の動き

➤ 2016.04.11

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2年1月に京都で締結された薩長同盟。まずは同盟締結直前の両藩の政治的状況を紐解いてみたい。

文久3（1863）年8月18日、長州藩が朝廷警護の役割を会津・薩摩両藩に奪われ、また攘夷論を基に行動していた公家らを連れて都から逃れる事件が発生する。これが七卿落ちとも呼ばれる八月十八日の政変である。

この出来事を起源として長州藩は朝廷における政治主導を挽回すべく、軍勢ともに京都に集結する。これに対抗すべく会津・薩摩両藩も軍事行動に着手し、元治元（1864）年7月についに軍事衝突することになる。これが禁門の変である。

朝廷に対して軍事行動に出た長州藩は窮地に陥り、幕府も長州に対して強硬な態度で臨むようになる。これが第一次長州征伐へとつながり、西郷隆盛はその参謀として参戦した。しかし、西郷の行動は幕府にとっては満足できるものではなかった。

薩長同盟前夜 その2

さらに苦境に立たされる長州藩

➤ 2016.05.01

➤ 著者：東川 隆太郎

元治元（1864）年11月の幕府主導による第一次長州征伐と、そのきっかけとなった禁門の変の間に、長州藩は下関においてイギリスやアメリカなどの四か国と砲火を交え、砲台等を占拠される事態となった。こうした藩の存亡すら危うい状況に立たされていたなかで約15万人もの征長軍を迎えなければならなかったのである。

ただ、征長軍参謀の西郷は長州藩が体制を維持し降伏する道を模索し、これは実現に至ったが、幕府にとっては不完全燃焼といえる結果であった。長州藩も体制は保持されたといえ、降伏したことに変わりはなく、西郷のいる薩摩藩とさらに深い溝が生じることになった。

そうしたなか、長州藩では内部クーデターが発生し、「武備恭順」が藩是となり、幕府との対決姿勢が鮮明になった。そしてこうした状況を打破するために新式の銃や蒸気船の購入は必要不可欠となり、その頼みの綱が犬猿の仲である薩摩藩だったのである。

薩長同盟の成立の日には諸説あり

➤ 2016.06.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年、犬猿の仲であった薩摩藩と長州藩が同盟を結ぶという歴史的出来事が発生する。ただ、その締結日に関しては諸説あるようだ。

ひとつが1月20日という説。この日の午後に大久保利通が国元へと出発しており、これは同盟締結を報告するためではないかと考えられている。

次に1月21日という説。これについては、坂本龍馬の警護をしていた長州藩士三吉慎蔵のこの日の日記に同盟締結をうかがわす文言がある。

さらに1月22日という説は、坂本龍馬の記録に西郷と小松と桂と会ったことが記されていることが根拠となっている。どれも史料から推測されたものであるが、すべてを突き合わせると近年は1月21日が有力ではないかと言われている。

ちなみに1月23日になると桂小五郎が坂本龍馬に対して、同盟の裏書を依頼している書簡があるので、確実にこの日以前ということになるだろう。まさに、極秘の同盟なだけに謎が残るのも当たり前といえよう。

薩長対立から「薩長同盟」締結への歩み（後編） — 1

➤ 2016.06.07

➤ 著者：福田 賢治

（著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏）

○薩長同盟の締結

木戸との会談を約束した西郷は、閏5月18日佐賀関に船着した際、大久保からの「至急上京せよ」との報に接し、中岡慎太郎だけを下船させ、自分はそのまま上京、木戸と会談する約束を破ったことから、下関で17日間待っていた木戸は激怒、龍馬や中岡も面子を潰され失望した。龍馬と中岡は上京して西郷と談判、西郷は約束を破ったことを謝ると同時に、長州が購入を望んでいる武器・艦船を薩摩名義で購入することを約束した。当時、外国商人が長州に武器・艦船を売ることが幕府が禁止していたからである。これにより長州は、新旧合せて7300挺の銃と艦船を購入できた。長崎から小松に随行して鹿児島に来た長州の井上馨は、長州との和解が真実であることを知り、帰国して藩主に報告した。長州藩主毛利父子は島津久光父子へ、武器、軍艦の購入斡旋のお礼に加え、「井上から薩摩のご様子を詳しく知り、万端氷解におよびました」との親書が届けられた。また、親書が届いた直後の9月21日、第二次長州征討令の勅命が出されたが、大久保利通は「非義の勅命は勅命に非ず」と抗議し、薩摩は出兵にも応じないことを朝廷や幕府に明言したこともあって、長州との信頼関係は急速に高まった。また、事が起きて薩摩が率兵上京する際は、長州が薩摩の兵糧米を確保するという約束も取り交わされた。

こうしたことから、薩長融和から同盟への気運が一層高まり、慶応2年（1866年）1月8日、木戸や品川弥次郎らは上京して薩摩藩邸へ入った。龍馬は遅れて20日に藩邸へ入ったところ、まだ何の話もなされていないばかりか、木戸は薩摩からの話がないとして帰り支度をしていたことに驚き、木戸・西郷どちらも藩の面子を捨てて話合うよう説得、その翌日、薩長同盟は成立した。

薩長対立から「薩長同盟」締結への歩み（後編） — 2

○薩長同盟「密約六箇条」の概要

薩長同盟が締結されたとはいえ、薩摩は元来、同盟・密約といっても、正式には文書としては残さないのが慣例であり、そのため、木戸は会談後に会談内容を自ら六箇条にまとめ、それを龍馬に送り、龍馬がその文書の裏に朱書して証明したのが「密約六箇条」として現在残されている史料である。その内容は

第一に、幕長間で戦いが始まったら、薩摩は兵3千ほどで京・大阪を固め、幕府を牽制すること、第二は、長州が勝ったら、薩摩は朝廷へ長州の立場を説明し弁護すること、第三は、もし長州が負けても、半年ないし1年は持ちこたえるので、薩摩は長州のために尽力すること、第四に、戦にならずに幕府が兵を引き上げたら、薩摩は朝廷へ長州の無実を証明するよう尽力すること、第五に、もし長州が京都に進出したとき、これを拒むものがいたら、薩摩はこれに決戦の覚悟を以て臨むこと、第六に、朝廷から長州冤罪のお許しが出たら、双方誠意をもって皇国の御為に碎身尽力すること、以上六箇条がその概要であった。

鹿児島行きのきっかけとなった寺田屋襲撃

➤ 2016.07.01

➤ 著者：東川 隆太郎

難産であった薩長同盟が締結されたが、その仲介的な役割を担った坂本龍馬は、安堵とともに定宿のひとつ伏見の寺田屋に慶応2（1866）年1月23日に落ち着く。

その日の夜半、同盟締結を察知していた幕府の捕吏が寺田屋を襲撃。龍馬は短銃で応戦し、どうにか寺田屋を脱出することには成功する。

襲撃の知らせを受けた薩摩藩は龍馬救出に藩兵を出し、材木置き場に潜伏していた龍馬を発見。薩摩藩の龍馬救出に際しては西郷隆盛の指示が大きかったと、後に龍馬は郷里へ手紙で伝えている。そこには「この時うれしきは、西郷吉之助は伏見の屋敷よりの早使より大気遣いにて、自ら短銃を玉込めし立ち出んとせし・・・」とあり、西郷は龍馬救出に気持ちも込めて尽力したことがうかがえる。

さて、龍馬は両手に重傷を負うなどしたため身体的には安静と治療、幕府からは身を潜ませることが必要となった。このふたつの条件を満たしてくれるのが、日本では南端の地であり治療に効果のある温泉豊富な鹿児島であった。

坂本龍馬とお龍 謎だらけの鹿児島城下での生活

➤ 2016.08.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年3月5日に大坂を出航した龍馬らは、下関や長崎を経由して10日には鹿児島城下に到着した。その後16日から霧島への旅行に出かけ、4月12日に鹿児島城下へ戻る。そして6月1日に鹿児島城下を桜島丸にて離れ長崎へと向かっている。

つまり寺田屋襲撃以降の鹿児島潜伏期間は、約3ヶ月であり、そのうちの約2ヶ月は鹿児島城下に滞在していたと考えられている。その間の滞在先のひとつが、小松帯刀が原良に所有していた別邸だ。

現在は個人宅の中に庭の一部が残り、その築山からは桜島を望むことができる。また龍馬の記録によると4月14日には「改正所」に行ったとしており、これは薩摩藩が設置した洋学校の開成所と考えられる。他にもお龍が後に残した証言記録に、上町に屋敷を設けられたことが語られている。また、龍馬と親交もあった中村半次郎こと桐野利秋の妻の証言によると、吉野は実方の自宅に龍馬が訪ねて来たとある。鹿児島城下での行動が正確に把握されていないだけに、実方訪問は興味深い。詳細に行程などが記録された霧島旅行と違い、鹿児島城下での滞在は謎な部分も多いが、それだけにいろいろと想像が膨らみ面白い。

英国公使パークスの鹿児島来航

➤ 2016.09.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年6月16日、英国公使パークスを乗せたイギリス軍艦プリンセス・ロイヤル他三隻が鹿児島湾に入った。文久3（1863）年7月の薩英戦争以来始めてとなるイギリス軍艦の入港である。

今回の入港は前回と異なり、薩摩藩と英国の親睦を深めることが目的とされていた。

パークスは、慶応元（1865）年に駐日特命全権公使兼総領事に任命され、それ以前は中国の厦門や上海で領事を務め活躍していた人物である。来日した際には、フランスとアメリカ、オランダとともに改税約書の締結などを幕府に要求し、外国人の自由貿易の安全を確保することに成功した。パークスは同時期に、長州藩の伊藤博文や高杉晋作とも接触している。これはフランス公使ロッシが幕府との関係強化に努めたことに対する行動でもあった。友好を求めての鹿児島来訪であったが、鹿児島では未だに薩英戦争の記憶新しく警戒心が強い藩士もあり微妙な雰囲気もあったが、来航が決まると藩主ら総出で歓迎ムードを演出することになった。

では鹿児島滞在の内容については次回。

「薩長同盟」成立と「寺田屋事件」－ 1

➤ 2016.09.08

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○薩長同盟の成立

文久3年（1863年）の「八・一八政変」や翌年7月の「禁門の変」など一連の対立により薩摩・会津勢に敗れた長州に対し、幕府はこれを機に第一次長州征伐を計画したが、参謀長となった西郷隆盛は、勝海舟の意見等も考慮し、長州に対し寛大な措置をもって戦わずして処理した。これを契機に、土佐の坂本龍馬や中岡慎太郎などが直接薩摩や長州に出向き、薩長間の融和を働きかけて説得した結果、慶応2年（1866年）1月21日、京都の近衛邸内「お花畑」といわれる小松帯刀の「有待庵」において、土佐藩の木戸孝允・品川弥次郎らを迎えて協議し薩長同盟が締結されたのである。

この薩長同盟は、「八・一八政変」や「禁門の変」など長州が起こした一連の事件は、冤罪から生じたものであるとの長州藩の意見を尊重し、その冤罪赦免に薩摩が尽力することを約束したものであった。

木戸は、このとき薩摩との間で話し合われ合意した事項を六箇条にまとめ、盟約に立ち会った坂本龍馬に送った。龍馬はその六箇条が書かれた書面の裏面に、話し合われた事項に相違がないことを朱書きして木戸へ送り返し、木戸はこれを藩に持ち帰り藩主に報告したのである。

「薩長同盟」成立と「寺田屋事件」－2

○龍馬が襲われた寺田屋事件

薩長同盟が結ばれた2日後の23日夜半過ぎ、龍馬は妻のお龍が働いている寺田屋に、龍馬の警護役として同行していた長州藩士の三吉慎蔵と酒を酌み交わし寝ようとしていた。風呂に入っていた妻のお龍が、外に伏見奉行所の捕り方が大勢来ているのに気付く、慌てて二階の龍馬らに告げたが、すでに伏見奉行所の捕り方が二階にまで迫ってきていた。三吉慎蔵は得意の槍で、龍馬は高杉晋作からもらった六連発銃で応戦したが、龍馬は右手を刀で払われ重症を負ったため、二人は裏階段から隣家の戸板をけ破り駆け抜けて裏通りへと逃れ、堀を渡って1町（約1090m）ばかり離れた材木問屋の小屋に身を潜めた。早朝、三吉慎蔵が助けを呼びに薩摩屋敷に駆け込んだところ、すでにお龍も来ていた。急を知った薩摩藩邸では、大山巖の兄の彦八らが船をだして新土佐堀に出向き、龍馬を救出したのである。この事件で、龍馬は3人の捕り方を射殺したため、以後も幕府のお尋ね者として追跡される身となったのである。

伏見の薩摩藩邸からすぐさま京都御所に隣接する薩摩の二本松藩邸（現同志社大学）へも急報、西郷隆盛は直ちに藩兵1個小隊を伏見藩邸に送り込み、更に、1個小隊を送って護衛とし、龍馬らを二本松藩邸に移して保護した。

○龍馬夫妻を薩摩へ招待

同年の3月1日、薩摩藩は、薩長同盟成立の立役者である坂本龍馬の功績へのお礼と、傷の温泉療養を兼ねて、小松帯刀や西郷らが帰国する際、龍馬とお龍を同道して薩摩に招待、原良の小松帯刀別邸でもてなすとともに、その後、日当山温泉や妙見、塩浸など霧島山麓の各温泉地で療養させた。

今日、これをもっていわゆる「日本初の新婚旅行」としているが、その発着場となった天保山公園近くの太陽橋の袂には、昭和55年、日本芸術院会員中村晋也氏の作による「坂本龍馬新婚の旅碑」が建立されている。

英国公使パークスが鹿児島で食べたもの

➤ 2016.10.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年6月16日に鹿児島に到着したパークス一行は、翌日に仙巖園にて藩主らの歓迎を受けている。鹿児島側の列席者は小松帯刀や桂久武、新納刑部などであった。また、その日の料理は日本料理が中心であった。45種類もの料理が出されたが、アルコールとしてビールやシャンペンも登場している。翌日18日は、今度は洋風料理が中心となつての歓迎であった。その際に強烈な印象を残した料理が豚の丸焼きである。三頭の丸焼き豚が卓上に並べられたというから、パークスらも驚いたことであろう。当時の日本では豚肉を食することはほとんどなかったが、薩摩藩は琉球王国の文化の影響もあつて例外であった。それにしても丸焼きの豚とはなんとも豪快である。

もちろんパークスらが鹿児島で楽しんだのは食事だけではない。集成館の硝子製造所を訪れたり、磯山への狩猟に出かけたりしている。鹿児島での滞在を満喫したパークス一行。イギリスはその後さらに薩摩藩よりの姿勢を示すことになる。

実は米国にも留学生を派遣していた

➤ 2016.11.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応元（1865）年は19名の薩摩藩士が英国へと国禁を冒してまで旅立った年である。

この話は出航した串木野の羽島に記念館が誕生するくらいに有名だが、慶応2（1866）年に今度は米国へと留学生が派遣されたことは案外知られていない。その時のメンバーは7名で、長崎に滞在していた米国商人のロビネットが世話をしている。工業と経済の大国である英国と異なり、米国は農業も大規模に行われる広大な国土を有する国。それだけに国を変えての留学には大きな意味があったと考えられる。

選抜された人物もとってもユニークであったりする。それは、文久3（1863）年の薩英戦争の際、イギリス艦隊に奇襲しようとした「スイカ売り決死隊」とも呼ばれる血気盛んな藩士が数多くいるということ。攘夷思想が普通であった頃に、それを実行しようとした人物らが海外へと向かうことは非常に冒険であったに違いない。

次回は、米国留学生のその後の活躍をご紹介したい。

龍馬・お龍の鹿児島への新婚旅行 — 1

➤ 2016.11.22

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○大阪の天保山から鹿児島为天保山へ着いた龍馬夫妻

薩長同盟締結に貢献した龍馬は、その2日後に寺田屋で伏見奉行所の捕方に囲まれ、手に重傷を負った。龍馬の危機を救った薩摩藩は、薩長同盟の功績と傷の養生を兼ね、龍馬夫妻を鹿児島に招待した。

慶応2年3月4日、龍馬夫妻は、小松帯刀や西郷隆盛、吉井幸輔（友実）らとともに大阪の「天保山」から藩船「三邦丸」に乗船、3月10日鹿児島の「天保山」に到着した。奇しくも大阪・鹿児島とも発着場が同じ名称の「天保山」であった。両天保山はいずれも天保年間に築かれた軍港で、お台場（砲台）もあった。但し呼び名は、鹿児島が「てんぽざん」というのに対し、大阪は「てんぽうざん」と呼んだ。

当時、女性は軍艦に乗せないしきたりであったが、お龍は特別に許可された。薩摩藩がいかに龍馬夫妻を大事に扱ったかがわかる。龍馬の鹿児島入りは、前年の5月以来2度目であった。鹿児島の天保山公園近くの太陽橋のたもとには、昭和55年2月28日中村晋也氏の作による「坂本龍馬新婚の旅碑」が建てられている。

龍馬・お龍の鹿児島への新婚旅行 ― 2

○龍馬夫妻が過ごした鹿児島での新婚生活

龍馬夫妻の鹿児島訪問は「日本初の新婚旅行」として語られているが、龍馬は鹿児島で過ごした二人の生活の様子を、土佐にいる姉の乙女宛の手紙に詳しく書いている。

当時は男女の駆け落ち以外、男女二人が旅行するという習慣はなかった時代である。夫が藩外へ出かける際も妻の同伴は許されず、単身赴任と決められていたこともあって、男は外出先で現地妻をめとることも許されていた。西郷が奄美大島に潜居した際、愛加那を現地妻としたことや、小松帯刀や大久保利通など多くの人が、京都で現地妻をめとっていた。ただし、現地妻を自分の国元へ連れ帰ることは御法度であった。こうしたことを考えると、龍馬夫妻の鹿児島旅行は全く例外中の例外であったのである。ただ、龍馬は土佐藩の脱藩者であり、お龍は寺田屋で働き、母は寺田屋に預けていたため、龍馬夫妻にとっては誰にも気兼ねすることなく新婚旅行の旅ができたのであろう。

海外を知ることで活躍する米国留学生

➤ 2016.12.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年の藩費留学生の渡米に関しては、前年に派遣された英国留学生と比較するとあまり知られていない感は否めない。しかし、米国留学生も帰国後には明治政府の一員として活躍をすることになる。今回は7名のうち2名に関して、その活動と功績を紹介したい。

ひとりは吉原重俊（よしはらしげとし）。西南戦争の終結後、物価の上昇などがあって日本の財政が破綻しかけていた明治14（1881）年、同郷の松方正義が大蔵卿となり、日本銀行を設立することになる。その初代日本銀行総裁となり、紙幣の信頼回復を目的とした手形や小切手取引の普及に努めることになった。その際の慎重な取引姿勢は、そのままに日本銀行の伝統として受け継がれることになった。

もうひとりは仁礼景範（にれかげのり）。海軍畑で活躍する薩摩藩出身の人々のなかでは地味な印象もあるが、明治7（1874）年の台湾事件の処理や江華島事件の護衛、明治11（1878）年には海軍兵学校長として後進の育成にも力を注ぐことになる。このように、ふたりの活躍だけでも、二回目となる留学生の派遣が薩摩藩というより、日本にとっていかに大切であったかが理解されるだろう。

薩長同盟締結のもうひとりの立役者・中岡慎太郎

➤ 2017.01.04

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応2（1866）年に締結された薩長同盟の立役者として薩摩藩や長州藩以外の人物で、まず思い描かれるのは坂本龍馬であろう。しかし、もうひとり両藩を結びつける働きをしたのが、やはり龍馬と同藩出身となる中岡慎太郎がいる。中岡も龍馬と同じように薩摩と長州を行き来し、西郷などと親交しながら新しい世の中をつくるべく奔走していた。

中岡慎太郎は天保9（1838）年、土佐の安芸郡北川郷の庄屋の長男として生まれた。始めは庄屋になるべく勉学に励んでいたが、文久元（1861）年に武市半平太の土佐勤王党に加盟すると人生の方向性が一変。同志らとともに五十人組を結成して京都や江戸で政治的活動をするようになる。この活動になかで土佐藩を脱藩し長州藩に逃れることになる。元治元（1864）年の禁門の変に参加した後は、再び長州に身を隠し、この年の暮れに西郷隆盛と接触することになる。ここから大きく薩摩藩との関係を強めていくことになるが、そのことは次回に。

今年は慶応3（1867）年に薩土盟約が結ばれてから150年

➤ 2017.02.01

➤ 著者：福田 賢治

坂本龍馬の存在が大きすぎるのか、陰の存在のように思われがちな土佐藩士の中岡慎太郎。薩摩藩との関係は案外深く、西郷隆盛邸に宿泊するなどの交流もあった。その接点は、元治元（1864）年12月4日に長州藩とともに都落ちしていた三条実美ら五卿の待遇条件に関しての交渉が、小倉で持たれた時のことであった。薩摩藩側からは西郷隆盛が参加していたが、中岡慎太郎は交渉が決裂した場合は、西郷と刺し違える覚悟であったという。

さて、慶応3年6月22日に京都で結ばれた薩摩藩と土佐藩の盟約は、中岡慎太郎が板垣退助と西郷を引き合わせることで始まるものでもあった。ちなみに薩土盟約は、武力なしに大政奉還を成功させることを藩論とする土佐藩と武力倒幕も視野に入れた活動をする薩摩藩との駆け引きとも捉えられるものである。10月15日には大政奉還の上書が朝廷に受理され、穏やかにことが進むかに見えたが、1ヶ月後の11月15日に、坂本龍馬とともに中岡慎太郎は、京都の近江屋で暗殺される。今年はふたりにとって没後、150年にもあたる。

龍馬・お龍の鹿児島への新婚旅行 2 — 1

➤ 2017.02.16

➤ 著者：福田 賢治

(著：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○霧島山麓での温泉や登山など最も幸せな時

龍馬夫妻は鹿児島城下のはずれにある原良の小松帯刀の別邸でしばらく過ごした。吉井幸輔（友実、後の宮内大丞）の邸にも宿泊していたとみられる。

しばらく鹿児島城下で過ごした後、3月17日、霧島山麓の、日当山温泉や塩浸温泉で過ごすことになり、鹿児島から船で浜之市（隼人港）へ渡った。その案内役を買って出たのが吉井幸輔と12歳の息子の幸蔵であった。日当山温泉は西郷がよく利用した温泉であり、また、霧島山麓の塩浸温泉は、傷を負った鶴がこの地の温泉に入り元気を取り戻したという言い伝えから「鶴の湯」とも言われ、古くから毒気や刀傷に聞くことで知られた温泉である。塩浸温泉で湯治している間、近くの谷川で魚釣りをしたり、小松帯刀からもらった連発銃で小鳥撃ちをしたりして自然を満喫している。このときよく随行した吉井幸蔵は、晩年、当時の龍馬夫妻の様子について「子供（12歳）の私にさえ目に余るようなことがたびたびあった」と、その仲の好きを息子の勇（「ゴンドラの唄」の作詞家）に語っている。

また、お龍については「急に怒ったり、笑ったりと気分屋」で、「はすっ葉な女に見えた」と、あまり良い印象を持たなかったようである。中でも幸蔵が驚いたのは、ある日のこと、龍馬とお龍の仲が気まずく二人は口を利かないときがあったが、そのとき龍馬が「もういい、もういいお龍さん、仲なおりをしよう・・・」と涙を流すのを見たことであったという。幸蔵は「龍馬さんは、なぜあんな女が好きなのだろう」と疑問に思ったと述べている。龍馬は、かた破りの自由で気ままな生き方をする女性を好んだといわれている。

龍馬・お龍の鹿児島への新婚旅行 2 — 2

また、二人は和気清麻呂を祀る和気神社や露天風呂の「和気湯」、犬養の滝（龍馬は手紙に「陰剣之滝」と記す）なども巡り、姉の乙女への手紙に「実にこの世のものと思えぬ程の楽しい日々を過ごした」と記している。

3月30日、龍馬夫妻は小松が療養していた霧島の栄之尾温泉を慰問、天孫降臨の「高千穂峰」登山や霧島神宮にも参拝している。高千穂峰では「触ると祟りがあると」案内人の田中吉兵衛が制止するのも聞かず、二人は頂上に祀られている「天之逆鉾」を引き抜いて遊ぶなど、過ぎたいたずらもやっている。

霧島で存分に楽しんだ二人は、4月1日再び塩浸温泉に帰り、1週間ほど湯治したのち、4月12日鹿児島城下に帰りつき、小松邸で過ごした。

慶応3年の五代友厚

➤ 2017.03.01

➤ 著者：東川 隆太郎

今から150年前の慶応3（1867）年、五代友厚は忙しく過ごしていた。前年も翌年も忙しい人物ではあるが、その後の功績にも大きく関わる出来事が連続している。

まず、五代にとって個人的なことになるが、藩主から鹿児島郡坂元村坊中馬場（現在の清水町）に屋敷を賜っている。五代友厚は長男ではないことから、生家である城ヶ谷（現在の長田町）の屋敷に居を構えるわけにはいかず、分家することになる。

この年の4月には、同じ天保6（1835）年生まれの坂本龍馬のために尽力している。それは、坂本龍馬が運航していた土佐藩の船が紀州藩の船と衝突し沈没した事件の調停である。沈没した船の名前からいろは丸事件と呼ばれ、福山藩の鞆の浦にて賠償交渉に立ち会い、龍馬ら海援隊が紀州藩から賠償金を受け取ることに成功している。坂本龍馬との親交を示すエピソードといえよう。

最後に平成27年に世界文化遺産に登録された長崎市にある小菅修船場の建造を、商人トーマス・グラバーや薩摩藩家老の小松帯刀に勧めている。蒸気機関による船の曳き上げを可能にした施設で、翌年に竣工した。

とにかく忙しい五代友厚であった。

旧鹿児島紡績所技師館（異人館）誕生

➤ 2017.04.03

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応3（1867）年は、世界文化遺産にも登録されている旧鹿児島紡績所技師館こと異人館が竣工してから150年にあたる。この建物は、現在は駐車場やレストランになっている場所にあった鹿児島紡績所に招聘されたイギリス人技師7名の宿舎として建てられたもの。西洋風の建物が珍しい時代だけに、薩摩の職人が試行錯誤しながら建設した建造物でもある。木造2階建て、屋根は方形造りで瓦葺き、建築面積約343平方メートルで、玄関は、正面中央部に八角形に突出した形をしていて、左右対称となっている。また、部屋の周囲は1階が石畳のベランダ、2階が窓付き回廊となっていて、延床面積の約3分の1がベランダと回廊に充てられている。こうしたベランダコロニアルという建築は、日本の近代建築最初の花ともいわれ、同じく世界文化遺産に登録された長崎のグラバー邸とともに、西洋風建築のルーツを知る価値を有している。

イギリス公使館書記官アーネスト・サトウと西郷

➤ 2017.05.01

➤ 著者：東川 隆太郎

イギリス公使館の通訳として幕末から明治にかけての日本に滞在したアーネスト・サトウは、日本での体験を「一外交官の見た明治維新」と題した書に記した。そのなかで西郷のことを「黒ダイヤのように光る大きな目玉をしていた」と表現した。おそらく当時の日本に滞在していた外国人のなかで最も西郷と親しい関係にあった人物といえるだろう。

サトウは、日本に来る直前は、ロンドン大学に在籍しており、その時に外務省通訳の試験を受けて合格し、文久2（1862）年に横浜に到着した。

薩英戦争の際には、イギリス艦隊に乗船して戦況を見守り、一時拘束された五代友厚の通訳もした。

西郷と初めて会ったのは、慶応2（1866）年6月にイギリス公使パークスが鹿児島に来た際のことである。この年の12月には、藩の支払を砂糖で代償できないかの交渉のため兵庫港で会談している。さらに慶応3（1867）年7月には、薩摩藩と長州藩に対して軍事援助も申し出て来たが、西郷は断っている。

維新後も交流は続いたが、サトウは明治2（1869）年に一時帰国している。明治政府からの下野や西南戦争の時期には、再び日本に滞在していたサトウは、西郷の行動や戦争を冷静に見守ることになった。日本にとっての激動の時期を直接知るだけに、思いもあったのだろうか、明治28（1895）年には駐日公使に就任し、後の日英同盟締結に尽力している。

慶応3年は薩土盟約締結の年

➤ 2017.06.01

➤ 著者：東川 隆太郎

幕末史のなかで薩長同盟は有名だが、薩摩藩と土佐藩の盟約についてはあまり知られていない。そもそも方向性の違いから盟約も慶応3年内に崩壊したため、その意義も語られていない。ただ、この盟約の締結は両藩の明治維新直前の動きを象徴するものでもあったりする。

締結は、6月22日に京都の三本木において、土佐藩側からは後藤象二郎、福岡孝弟、坂本龍馬など、薩摩藩側は小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通が出席して行われた。これは大政奉還・公儀政体の創出に向けたものであり、もしかするとそれらを実現するためには武力を用いることも意識したものであった。

薩摩藩の期待は、大政奉還の建白の機会が失敗した際には、武力による局面打開が必要であり、それには土佐藩の協力が不可欠であった。9月頃に土佐藩は、非武力による大政奉還運動を推進し始めたため、両藩の密な協力体制は、失われることになる。ただ、その後も対立はするものの両藩の協力は王政復古後まで継続することになる。

日本初の紡績所「鹿児島紡績所」 — 1

➤ 2017.06.12

➤ 著者：福田 賢治

(文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○紡績業開発に意欲を燃やした島津斉彬

薩摩藩主島津斉彬は、薩摩の豪商濱崎太平次が琉球から持ち帰った西洋の綿糸を見て、「将来これは日本の養蚕・絹織物業の脅威となる」と直感、蘭学者の石河確太郎らに紡績の研究を言い渡した。また、上方から綿栽培の指導者を招き綿作りを奨励、城外の中村に紡績所を建て、さらに田上や郡元に水車館を造り、織糸、織布、帆布、漁網製造など紡織業の開発に努めた。長崎から木製の歯車を使った紡績機械も購入している。

当時、広い海を抱えていた薩摩は大小5,300隻もの帆船を抱え、その帆布を大阪などから購入していたが、これらのすべてを藩内で製造、従来の仕入れ価格の三分の一の値段で製造し、藩財政に大きく貢献した。

日本初の紡績所「鹿児島紡績所」－2

○日本初の洋式機械紡績所「鹿児島紡績所」の創設

安政5年（1858年）7月に斉彬が急逝、集成館事業は一時衰退するが、5年後に起きた薩英戦争により、集成館事業の重要性が再認識され、五代友厚や石河確太郎らの建言に基づいて、藩は西洋の学問を奨励するとともに英国へ留学生を派遣、西洋の新しい技術や機械を積極的に導入することになった。

慶応元年（1865年）英国への留学生を引率した五代友厚や新納久脩は、プラット・ブラザーズ社から紡績機械を購入、同時に工場建設や技師の派遣も依頼した。紡績機械は開綿機・梳綿機、錘精紡機・力織機など150台余りで、ほかに蒸気機関も導入、翌年3月には司長イー・ホームをはじめシリングフォードなど4人の技師が鹿児島に入り、工場建設が始まった。

更に、慶応3年（1867年）1月には、工場長ジョン・テットローが機械とともに到着、随行した2名の技師も加わって計7人となり、同年5月に日本初の洋式機械紡績所が竣工、勝手方用人の松岡正人が紡績所総裁に就任した。

原料の綿花はおもに関西方面から買い入れ、職工200人余りが1日10時間の就業で、180kgを紡いだという。明治2年には白木綿6万5千反、かすり2千600斤ほどを生産しており、おもに関西方面で売却された。

○「鹿児島紡績所技師館」（異人館）の建設

鹿児島紡績所の隣には、その建設や技術指導に関わった英国人技師の宿舎「鹿児島紡績所技師館」が建設され、現存している。別名「異人館」と呼ばれている西洋風の建物であるが、外国人技師の指導の下に日本人の手で建てられ、屋根の内部構造や扉の取っ手の位置の低さなど、随所に日本風が見られる。また、この異人館は、一時鶴丸城内に移転、「中学造士館」の職員室として利用され、その後にもたもとの現在地に戻された経緯がある。

今年はパリ万博初参加から150年

➤ 2017.07.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応3（1867）年、薩摩藩は徳川幕府や佐賀藩とともに日本としては初めて万国博覧会に参加した。

開催地はパリで、それまで海外に渡ってまで世界の国々と交流する機会のなかった日本にとっては画期的な出来事となった。このパリ万博への参加は、慶応元（1865）年に英国へ派遣された留学生らの引率者であった五代友厚らが画策したものであった。薩摩藩の使節団は2月6日にパリに到着した。それは幕府の到着よりも二ヶ月ほど早いものであった。

使節団は岩下方平や市来政清、堀孝之など10名で、「薩摩琉球国」として出展し丸十紋も掲げるといった、まるで日本のなかの独立国のような振る舞いであった。その薩摩パビリオンは、幕府のパビリオンとは隣接地にあって琉球通りと名付けられた通りもあった。

このようにして、薩摩藩の名前は世界に知られることになったが、幕府同様、翌年の明治維新によって薩摩琉球国としてのブランド力も薄らぐことになる。

勲章による戦いが展開されたパリ万博

➤ 2017.08.10

➤ 著者：東川 隆太郎

パリ万国博覧会には、日本から薩摩藩以外に徳川幕府と佐賀藩も参加した。そのなかでも薩摩藩は世界の国々にいち早く認められるようにと、各国の要人に勲章を送った。これは「薩摩琉球勲章」と呼ばれるもので、薩摩を象徴する丸十紋を中央にして、その周りに五稜星と「薩摩琉球國」という漢字の切り文字が刻まれるものであった。

当時の西欧諸国では勲章が権威のある授与品であることを情報として早くに有していた薩摩藩は、幕府が気づく前から贈与を進めていた。

世界の国々が薩摩藩を評価するなかで、遅れてはならぬと幕府も「葵勲章」の制作に入るが、完成に至ることはなくパリ万博は終了した。その後に薩摩藩と幕府は、戊辰戦争で戦うことになるが、すでに情報や文化の戦いは日本から遥かに遠いヨーロッパの地で行われていたといえるだろう。

パリ万博で出品したものとは その②

➤ 2017.09.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応3（1867）年のパリ万博へは、薩摩藩と徳川幕府、さらに佐賀藩も出品している。

薩摩藩は、上布や砂糖といった琉球産品や薩摩焼など480箱。幕府は武器・図画・漆器・書籍など約1014点。佐賀藩は伊万里の陶磁器を中心として506箱であったという。

薩摩藩の出品した薩摩焼は、苗代川の朝鮮陶工の朴正官の制作した錦手花瓶が特に賞賛されている。こうした薩摩焼は、英国のサウスケンジントン博物館が購入することになる。このような動きは、すぐに貿易などで実を結ぶことにはならなかったが、明治6（1873）年に開催されたウイーン万博では、12代沈寿官が出品した大花瓶が進歩賞を受賞し、さらに世界で賞賛されることになる。

このようにパリ万博は、世界に薩摩の文化を知ってもらうきっかけとなった。

パリ万国博覧会への初参加（その1） — 1

➤ 2017.09.22

➤ 著者：福田 賢治

（文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏）

○「パリ万国博覧会」参加と「海外渡航禁止令」の解禁

パリでの万国博覧会は8回開かれているが、そのうち日本が初めて参加したのは、慶応3年（1867年）4月に開催された第2回のパリ万博であった。当時、日本はまだ海外渡航は禁止されていたため、開催前年の慶応2年4月7日、幕府は「海外渡航禁止令」を解き、日本人も海外渡航ができるようにした。

薩摩藩留学生がイギリスへ出発した慶応元年には、まだ海外への渡航は禁止されていたため、留学生は内密で串木野の羽島港からグラバーの船でイギリスへ渡ったのである。

海外渡航が解禁になった理由としては、幕府の公的海外使節団や薩摩藩英国留学生などのニュースが伝わり、使節団や留学生と交わった外国の人々は、誠実で礼儀正しく、熱心に学ぶ日本人に対し好印象を持ち、政・財界を問わず高い評価を得るなど、日本への関心が高まっていたことである。一方、日本国内においても、日本を脱出して西洋文化に学ぼうとする人が年々増えてきており、密航者も増加していた。こうした時期に、パリ万国博覧会への参加という事情も重なり、国内における海外熱も一段と高まったことから、幕府は海外渡航解禁へと踏み切ったのであった。

パリ万国博覧会への初参加（その１）－２

○日本の政情不安と英・仏の思惑

慶応３年というと、国内では１０月に「大政奉還」、１２月には「王政復古」の大号令が下り、翌年１月には「鳥羽伏見の戦い」が始まるというあわただしい年である。戊辰戦争の前年ということもあって、欧米諸国も幕府自体が存続するのか、それとも討幕がおこなわれるのかと、欧米諸国はその見極めに大変神経を使い、様々な憶測が飛び交った時期でもあった。

特に、イギリスとフランスの間では、日本における外交上の主導権をめぐって両国の駆け引きが目立ち、それぞれの国の駐日公使や大使館職員は、本国への報告や対日交渉に頭を悩ませていた。

○日本がパリ万国博覧会に参加することになったきっかけ

パリ万博への参加は、当時の日本駐在のフランス公使ロッシュが「日本の存在と権威を世界に知らしめるよい機会」と幕府に参加を勧めたことに始まる。幕府は大名や商人など国内に広く応募を呼び掛けたが、参加を申し出たのは、薩摩藩と佐賀藩、それに埼玉出身の江戸商人清水卯三郎だけであった。

幕府は幕府自体の出品も含め、これらを一つにまとめて日本として出品するつもりであったが、薩摩藩は幕府が出品を決定する前に、すでにフランス貴族のモンブランの勧めを受けて出品を決定しており、幕府とは別に薩摩藩独自で準備を進め、会場も幕府とは別の独立した区画を確保していた。

パリ万国博覧会への初参加（その1）－3

○薩摩にパリ万博参加を勧めたモンブランとは

モンブランは、フィリピンに旅行しているときペリーの日本来航を知り、日本に来て長崎に住んだ人である。文久元年（1861年）、日本人の斎藤健次郎を伴いパリへ帰国、「日本」と題した100ページ余りの本を出版、日本人の優秀さや、積極的に西洋文明を学ぼうとする精神を讃えるとともに、日本の明るい将来を展望するなど日本を高く評価したことから、西欧における「日本通」として有名になった人物である。ベルギーにも領地をもつほどの資産家でもあった。

モンブランは最初、幕府と親交があり、日本に滞在した経験を買われ幕府使節団の一員としてパリに同行したが、ナポレオン3世との謁見において、通訳の選定で手違いが生じ、幕府から疎外されたかたちになって幕府と離れた。以後、薩摩の使節団、新納久脩や五代友厚などと親交を深め、薩摩との間に「ベルギー商社設立」の仮契約も結んだ。これは後に破棄されるが、イギリスからフランスへ渡った留学生などの世話もしており、このモンブランが薩摩にパリ万博への参加を進めたのであった。

ただ、このモンブランについては、アメリカに渡った鯨島尚信や森有礼などは、このモンブランは信用できない人物として「ベルギー商社設立」には猛反対しており、大久保などに反対の意見書なども提出している。これは、フランスと利権を争っていたイギリス寄りの考えとも言われ、薩摩藩留学生を世話したオリファントやグラバーらの考えが、多分に留学生にも影響しているとの見方もある。

慶応3年の大久保利通の行動

➤ 2017.10.02

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応3（1867）年は薩摩藩にとって、様々な決断を迫られる年でもあった。それは西郷にとってもしかり、大久保にとってもしかりである。

藩の上層部への説得や長州藩や土佐藩、さらには朝廷とのすり合わせなど、やらないといけないことへの決断への間隔に短さが求められる時期でもあった。この年の大久保は、とにかく忙しかった。まず行動の中心は薩摩ではなく京都であった。さらに9月には伊藤博文らと山口に向かい、毛利藩主らと面会している。

10月26日には、西郷、小松らとともに鹿児島で島津久光らに倒幕への軍事行動への理解を求めている。その後となる11月には足痛で動けない小松帯刀の代わりに土佐藩に赴き、山内豊信に上京の説明を行っている。12月9日の小御所会議の前となる11月27日には、京都において越前藩の松平慶永に招かれて、意見を求められている。

このような超過密なスケジュールをこなし続けられた胆力と体力、知力が慶応3年の大久保には十分に備わっていたといえる。

桐野利秋の京在日記からみつめる慶応3年

➤ 2017.11.01

➤ 著者：東川 隆太郎

桐野利秋こと中村半次郎は、慶応3（1867）年のほとんどを京都で過ごした。その際の日記を残していて、それは9月朔日から12月10日までのものである。この間では様々な出来事が京都で起り、それに桐野を大きく関わっている。そのひとつが上田藩士の赤松小三郎の暗殺である。京在日記には、そのことが詳細に記されている。

まず、桐野利秋は人斬り半次郎と呼ばれているが、記録の上で殺しが確認できるのはひとりである。それが赤松小三郎で、京在日記によると9月3日に暗殺の計画を立てて実行している。赤松小三郎は、軍師であり薩摩藩にも出入りしていた。そのため薩摩藩の軍事情報も知り得ていると感じ、帰国する赤松の情報漏えいの疑いがあるとみて暗殺したとされている。半次郎は暗殺の際にとどめを刺している。このように京在日記には、隠してもよさそうな暗殺の記録もあり、まさに生の桐野利秋を知ることができる貴重な史料といえる。

京在日記にみる中村半次郎

➤ 2017.12.01

➤ 著者：東川 隆太郎

慶応3（1867）年における京都滞在中の様子を日記として記録していた中村半次郎こと桐野利秋。その中村が、この年の暗殺された坂本龍馬と意外と親密な関係にあったことはあまり知られていない。もちろん、西郷らと行動を伴にしていただけに、顔見知りであることは理解できるが、どのくらいの距離感で付き合っていたのかを京在日記は教えてくれる。

坂本龍馬と中岡慎太郎が近江屋で暗殺されたのは11月15日。その五日前の10日に、散歩の途中で坂本龍馬と出会ったことが日記にある。そして17日に暗殺されたことを知る。そこには壬生浪士組こと新選組の仕業とのうわさがあるとある。そして翌日の18日には、埋葬されたばかりのお墓にお参りしている。そこには土佐藩の高松太郎や坂本清次郎がいて、一緒に墓を離れている。この日の夜には大久保利通の京都の屋敷に宿泊しているので、大久保と龍馬の死について語ったりしたのかもしれない。

埋葬されてすぐに墓参は、龍馬を弔う気持ちの深さに他なく、親しい関係であったことが理解できる。

パリ万国博覧会への初参加（その2）－1

➤ 2017.12.08

➤ 著者：福田 賢治

（文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏）

○幕府のパリ万博参加決定の遅れ

フランスは幕府に対して、ロニーという外務省係官を通して慶応元年（1865年）秋以来、パリ万博への出品要請をしてきていたが、参加については消極的であった。ところが薩摩藩は、薩摩藩英国留学生を引率した五代友厚などを通して、モンブランが強く参加を勧めたこともあって、パリ万博への出品を早く決定し、全権使節として家老の岩下佐次右衛門（方平）らを派遣することになった。そのため、幕府も傍観するわけにもいなくなり、急ぎ幕府も参加を決定するとともに、諸大名や商人たちへも参加の呼びかけをすることになったのであるが、急なことでもあり、薩摩以外では、佐賀藩と埼玉の商人清水卯三郎だけの参加となったのであった。

パリ万国博覧会への初参加（その2）－2

○幕府は薩摩藩に2か月遅れてパリ到着

薩摩藩一行は、全権の岩下左次右衛門、それに側役格の市来六左衛門政清（西郷の妹コトの夫）、博覧会担当の野村宗七（盛秀）ら5人と、通訳の堀壮十郎（孝之）、大工の鳥丸啓介、留学生の岩下長十郎（方平の息子）、英国人のハリソンとライルホームの総勢11人が派遣された。

一行が薩摩を出発したのは、慶応2年（1866）年11月10日（新暦12月16日）で、パリに到着したのが翌年の慶応3年（1867年）1月2日であった。幕府がこうした薩摩の動きを知ったのは、薩摩がパリに到着した後であり、あわててフランス政府に抗議するとともに、将軍の名代として清水昭武（慶喜の弟）を派遣し、随行者として外国奉行の向山一履（隼人正）、同支配組頭の田辺太一、昭武の傳役の山高信離（岩見守）らを派遣したが、一行がパリに到着したのは、薩摩に遅れること約2か月後の陰暦3月7日（新暦4月11日）のことであった。昭武は万博参加後の5年間の留学が主目的であった。

モンブランは当初、昭武の世話役として幕府に採用してもらう心つもりであったが、これを断られたため、幕府から薩摩寄りに変心したともいわれている。

○幕府とは別個の出品ブースを確保

モンブランは、33才の若さであったが、幕府に先立って薩摩のためにフランス政府に働きかけ、世話役としての役割をよく果たした。新聞などを使って大いに宣伝し、あたかも日本には幕府と薩摩政府があり、対等であるかの如く論じさせたのであった。

また、幕府より先に交渉を始めた薩摩は、幕府とは別区画で独立した出品ブースを確保するとともに、呼称も「薩摩琉球国政府」としていたが、幕府の抗議により呼称だけは「日本薩摩太守政府」と改め、幕府は「日本大君政府」として出店した。また、モンブランの勧めもあって、フランス国民が勲章好きということを利用し、「薩摩琉球国勲章」を作り、フランス皇帝をはじめ、政府高官に贈呈したため、各国の目が薩摩藩に集中し話題となったのである。

鳥羽伏見の戦い その①

➤ 2018.01.09

➤ 著者：東川 隆太郎

今からちょうど150年前の慶応4（1868）年、薩摩藩は正月早々に戦っていた。これが鳥羽伏見の戦いであり、この戦いから約1年半に及ぶ戊辰戦争が始まる。

戦闘は1月3日から6日までの4日間に行われ、舞台は大坂方面から京都へと向かう鳥羽伏見の両街道沿いで行われた。

薩摩藩と長州藩を中心とする新政府軍と、大坂城から上って来た旧幕府軍との戦いで、両軍合わせて約2万人が激突することになる。

幕府軍のほうが決定的有利に立っていたものの、新政府軍はここでもう勝利を収める。まさに天下分け目の戦いであり、もしこの戦争で敗れていたら、「明治維新」という言葉自体が存在しなかったかもしれないくらいの、その後の歴史的流れを左右するものであった。

もちろん、この戦いにおいて西郷隆盛は重要な役割を担い、大久保利通も後方において支援し続けた。その具体的な動きについては次回ご紹介したい。

鳥羽・伏見の戦い～その②

➤ 2018.02.06

➤ 著者：東川 隆太郎

旧幕府軍の長である徳川慶喜は、この戦いに際して「討薩の表」を発表して大坂から京都へと街道を進軍させた。朝廷を敵とする意識ではなく「君側の奸を除く」こと、つまり朝廷周辺から薩摩藩を追い出すことを目的として戦いであった。そのような旧幕府軍に衝撃が走る。

戦闘開始から3日目となる1月5日朝に、皇軍であることを示す錦旗を掲げた薩摩藩の一小隊と仁和寺宮嘉彰親王が本陣である東寺を出発する。その錦旗の登場は、まず薩摩軍の士気を鼓舞させることになった。

次に旧幕府軍には精神的な圧力となった。ちなみに錦旗は、薩摩軍側は見たという記録があるが、旧幕府軍側が見たという記録はない。噂が噂を呼んで広がったとされている。その錦旗を実際見ていないにも関わらず、一番衝撃を持って受け止めたのは、大坂城にあった徳川慶喜であった。

そして1月6日夜、徳川慶喜は大坂城をひそかに抜け出し、軍艦で江戸に戻ることになる。

こうして鳥羽伏見の戦いは、薩摩藩や長州藩を中心とした官軍の勝利で幕を閉じることになる。

パリ万国博覧会への初参加（その3） — 1

➤ 2018.02.26

➤ 著者：福田 賢治

（文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏）

○パリ万博に参加した薩摩藩と佐賀藩

幕府の呼びかけにも関わらず、慶応3年（1867年）のパリ万国博覧会に出品したのは、幕府以外では、薩摩藩と佐賀藩のみであった。薩摩は早くからパリ万博への参加を決定し、準備を進めていた。薩摩の出品物は約四百箱で、その主なものは、薩摩焼、竹細工品、茶、砂糖、泡盛（米焼酎）などであった。佐賀藩は陶磁器など約五百箱、商人として唯一参加した埼玉出身の江戸商人清水卯三郎は、四万二千両相当の額の品を出品したという。

幕府のパリ万博への参加決定が遅れたこともあって、薩摩と幕府との溝が深まり、同じ日本からの出品にも関わらず、物品陳列場の表札記名やブースの別枠確保が問題となり、さらに、薩摩が「薩摩琉球国勲章」を作成してフランス公官に贈ったことから、フランスでは薩摩の名声が高まり、一層幕府との溝が深まったのであった。

幕府の向山全権公使は、薩摩の勲章があまりにも話題となったので、幕府も勲章を作成して配るよう上申したが間に合わず、悔しがったという。こうしたことから、欧州では日本がドイツ連邦政府と同様に、連邦制になっているとみなす国が増え、欧州における幕府の権威は著しく失墜したといわれる。

パリ万国博覧会への初参加（その3）－2

○薩摩言葉が唯一英語になった「醤油」（SOY SAUCE）

昔から「醤油」のことを鹿児島では「ソイ」という。パリ万博では薩摩は醤油も出品し、「SOY」と標示して売り出したことから、醤油のことを「SOY」と呼ぶようになったといわれ、薩摩言葉が唯一英語になったものである。

余談であるが、薩摩では文久3年（1863年）、生麦事件がもとで薩英戦争が始まったが、その後、薩摩とイギリスは横浜で講和条約を結んだ。その際、薩摩はイギリスに対し「温州みかん」を贈った。イギリスの人々はこれを食して、その美味さに驚き大変喜んだという。以来、「温州みかん」のことを英語で「SATSUMA」（サツマ）と呼ぶようになったのである。

○モンブランのその後

薩摩はモンブランの協力もあって欧州における一定の評価を高めたが、モンブランは、ベルギー商社設立が不調に終わったことから、その代償として今度は薩摩に対し、小銃5千挺、大砲20門及び軍服の売り込みをはかったため、薩摩はこれを断った。この時期、薩摩はイギリスと懇意にしていたこともあって、これ以上フランスとの緊密化は、イギリスとの友好関係にひびが入ることを懸念し、モンブランとも距離をおくようになったのである。

モンブランは、明治になると、明治政府の代理公使兼総領事としてパリ公館を開設し、薩摩の前田正名を雇い、明治3年に日本公使館が開設されるまで外交事務を掌ったが、ここに初代の駐仏弁理公使として薩摩の英国留学生の一人である鯨島尚信が赴任してきたこともあって、モンブランは辞任したのである。以後、日本も西洋文明の賞賛だけでなく、西洋を冷静な目で見えるようになり、英国留学生の力がようやく発揮される契機となったのである。

江戸総攻撃前の駿府（静岡）会談

➤ 2018.03.01

➤ 著者：東川 隆太郎

鳥羽・伏見の戦いで勝利した新政府軍は、徳川慶喜がいる江戸を目指した。西郷隆盛は東征軍の参謀として、2月14日には名古屋を出発していた。3月の始めには三島（静岡県）に本陣を敷いていたが、3日には駿府（静岡）に引き返している。その西郷に対して、勝海舟は山岡鉄太郎こと鉄舟を使者として面会させている。つまり、有名な西郷と勝の会談には、前夜があったということである。

ちなみに鉄舟は、徳川幕府の旗本出身で剣や術軍学に長けて、後に新政府にも仕え伊万里県知事などに就任している。面会は3月9日に行われ、新政府軍の江戸開城に向けた条件が示された。それは、徳川慶喜の謹慎恭順と備前（岡山）藩への御預け、軍艦や武器の引き渡し、城内居住の家臣の向島移転などである。この山岡鉄舟と西郷の面会が、江戸における勝海舟との会談に繋がることになる。

江戸城開城の立役者・勝海舟と西郷との関係

➤ 2018.04.02

➤ 著者：東川 隆太郎

明治元（1868）年4月11日、徳川慶喜が江戸より水戸へと向かい、江戸城が開城された。戊辰戦争はその後も続くが、ひとまず江戸のまちが戦場とならずに城の受け渡しが行われた最大の立役者は、やはり西郷隆盛と勝海舟であろう。

ふたりの関係は、江戸城開城前後だけではなくその後も様々なかたちで継続していく。そのひとつの表れが、明治12（1879）年に南葛飾郡大木村木下川浄光寺境内に海舟が建立した西郷の記念碑である。賊軍の将として西郷が最期迎えた西南戦争終結から2年しか経っていないだけに慎重に進められ、西郷と同郷の明治政府に仕える吉井友実にも意見を聞きながらの建立であった。またこの後、勝は西郷と糸との間に生まれた寅太郎の海外留学にも尽力している。

西郷に関わり続けることが勝の人生において重要であった思える事柄である。

西郷隆盛も参戦した上野戦争

➤ 2018.05.01

➤ 著者：東川 隆太郎

明治元（1868）年4月に開城された江戸城。しかし、旧幕府勢力すべてが新政府に対して恭順してはいなかった。特に抵抗勢力の一部は「彰義隊」と名乗り、徳川家の菩提寺である寛永寺のある上野に集結した。西郷らはその討伐を決意し、長州藩の大村益次郎の作戦計画に従い、5月15日、上野に進撃した。

薩摩藩は正面となる黒門口から攻撃することとなったが、この場は難所のひとつとなり犠牲者も多数出すことになった。佐賀藩が自藩で製造したアームストロング砲などを放つなどの活躍を示し、彰義隊を一日で撤退させることになった。

この戦いでは、戊辰戦争のきっかけのひとつとなった「薩摩藩邸焼打ち事件」を先導した益満休之助が負傷後に亡くなっている。

西郷さん、久しぶりの鹿児島帰り

➤ 2018.06.01

➤ 著者：東川 隆太郎

江戸城無血開城や上野戦争など、緊迫した日々を江戸を中心に過ごした西郷さん。6月14日、久しぶりに鹿児島へ到着しました。この時の西郷邸は、まだ上之園（共研公園近く）にありました。西郷さん以外の兄弟たちは戊辰戦争のために各地を転戦しており、女性や子供が多い家への帰宅でもありました。

江戸での毎日は西郷さんの体に堪えるものだったのでしょう。すぐに日当山温泉（霧島市）に出かけています。日当山温泉は、西郷さんがとってもお気に入りとしていた湯治場で、その後も何度となく出かけています。行程は、鹿児島港から錦江湾を船で浜之市港に向かい、そこからは徒歩となります。浜之市港から日当山温泉までは4キロほどの距離で、しかも平坦なので行きやすい湯治場といえます。日当山温泉から鹿児島に帰る8月上旬以降の西郷さんは、さらに多忙な日々を送ることになります。まさに西郷さんの夏休みが日当山温泉での湯治だったのかもしれません。

王政復古から戊辰戦争へ — 1

➤ 2018.06.21

➤ 著者：福田 賢治

(文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○ 討幕への歩み

薩摩が「公武合体」から「討幕」へと方針転換したのは、慶応3年（1867）5月25日のことでした。その前日、京都で雄藩諸侯の島津久光（薩摩）、松平春嶽（福井）、山内容堂（土佐）、伊達宗城（上島）と将軍慶喜が会談、長州処分や兵庫開港の問題など幕政改革について協議しましたが、慶喜は幕府の権威をもって譲らず、ついに「四侯会議」は決裂しました。その翌日の25日、薩摩は京都藩邸において、小松、西郷、大久保など藩首脳が藩邸会議を開き、「討幕やむなし」との結論に至り、それまでかたくなに公武合体を主張してきた久光も、ついに「公武合体から討幕へ」と、方針転換することを決意しました。

しかし、薩摩では門閥派を中心に、「鎌倉以来700年の歴史を誇る島津氏の存亡をかけた出兵」には反対論も根強く、そのため、一同は帰国して説得に当たる一方、雄藩諸藩に対しても、討幕決定の報告と討幕出兵を要請したのでした。

また、大久保は討幕反対者の説得と雄藩諸国への出兵要請を考え、洛北で謹慎中であった岩倉具視を訪ね、「討幕の密勅」を朝廷から出してもらおうよう画策しました。これは慶喜が10月14日に「大政奉還」をしたことにより、取り下げられますが、薩摩は反対派説得と率兵上京の材料として極秘に利用したのでした。10月には、小松、西郷、大久保らは帰国途中山口により、毛利敬親父子に面会して出兵打ち合わせを行った後帰国し、11月13日には藩主忠義は西郷を伴い軍艦3隻に3千の兵を引き連れて出発、途中三田尻により毛利父子とも会見、23日京都に入ったのでした。

王政復古から戊辰戦争へ ― 2

○「王政復古」から「鳥羽伏見の戦い」へ

慶応3年12月9日、京都に於いて「王政復古」が宣言され、それに伴い将軍慶喜の辞官・納地が決定し、これが二条城の慶喜に伝えられるや騒然となり、慶喜は不測の事態を避けるため、二条城から大阪城へと移ったのでした。

ところが12月25日、江戸市中を荒らす浪人たちが薩摩藩邸に逃げ込むことから、市中取り締まりの庄内藩などがいきりたち、薩摩藩邸を焼き討ちし、薩摩は50人が死亡、50人余りが船に避難、残りは捕虜となりました。この報が大阪城に伝わると、「薩摩打倒」の聲が高まり、1万5千の幕府軍は鳥羽・伏見の両街道から京都の5千の薩長軍めざして進軍、ついに慶応4年1月3日、鳥羽・伏見の戦いが始まったのでした。

しかし、新式装備に勝る薩長の勢いに加え、大久保や岩倉らが事前に準備していた「錦旗の御旗」が翻るのを見た幕府軍は、自分たちは「賊軍」だと知り、急に戦闘意欲をなくして総崩れとなり、また、慶喜は兵を見捨てて夜中に船で江戸へ帰り、寛永寺にて自ら謹慎するとともに、篤姫や和宮に対して朝廷にとりなしをしてもらうよう依頼したのでした。

その後、新政府は東征大総督に有栖川宮熾仁親王を命じ、西郷はその参謀となり戊辰戦争が本格的に始まったのでした。

「難儀は越後」の北越戦争は大激戦地

➤ 2018.07.01

➤ 著者：東川 隆太郎

西郷隆盛や黒田清隆も戦地に赴いた北越戦争。新政府軍と対立した長岡藩は、「武装中立論」を唱えて会津藩とも当初は行動を共にしていなかった。この論を唱えたのは筆頭家老であった河井継之助で、江戸藩邸を引き払う際に藩主の牧野家が所有する家宝などを売却。それを資金にして最新鋭の武器である「ガトリング砲」を2門購入するなどして武装体制を整えていた。慶応4（1868）年5月2日、小千谷の慈眼寺で新政府軍の軍監である岩村精一郎と河井継之助が談判。しかし、交渉は決裂して長岡藩と新政府軍との戦闘が開始されることになる。

こうして長岡藩は、ようやく会津藩らと同盟を組むことになり、北越全体を巻き込む全面戦争に突入する。この激戦の現場には、西郷隆盛の弟である吉二郎もいた、鳥羽伏見の戦いに病気で参戦できなかった悔しさを抱えながら戦場へ赴いていたのだ。

戊辰戦争で亡くなった西郷吉之助の弟・吉二郎

➤ 2018.08.01

➤ 著者：東川 隆太郎

戊辰戦争のうちでも、「難儀は越後」として伝わる激戦地、現在の新潟県。そのなかの三条市を流れる五十嵐川沿いの戦いで、西郷吉之助の弟・吉二郎は致命的な傷を負いました。江戸や京都での勤め、または奄美諸島への配流などで長男でありながら家を空けることが多かった吉之助に代わり、西郷家を支えていたのは次男の吉二郎でした。

戊辰戦争は初めての藩外での活躍の場であったにも関わらず、吉二郎は慶応4（1868）年8月2日に戦場で負傷します。その後高田（現在の上越市）の病院に搬送されますが、14日には帰らぬ人となりました。

その報を聞いた西郷は、激しく悲しんだと伝わります。また、年齢的には自分が兄であるが、家を支えてきた吉二郎の方が兄のような存在であったとも述べています。

吉二郎の墓を管理する高田日枝神社の神主に、吉之助は祭祀料を遣わしています。戊辰戦争は西郷家にとっても悲しい戦争でありました。

庄内藩と西郷とのつながり その①

➤ 2018.09.06

➤ 著者：東川 隆太郎

明治元（1868）年9月27日、西郷吉之助は山形の庄内に到着する。その直前まで長岡藩の激しい抵抗により、苦しい戦いが続いていたなかでの庄内入りであった。

庄内藩は、前年暮れに江戸で発生した薩摩藩邸焼打ち事件に深く関与しており、藩主である酒井忠篤は新政府軍に対して帰順降伏したものの、厳しい処分は免れないと覚悟していた。

しかし、西郷吉之助の指示を受けた参謀の黒田清隆の対応は丁寧で、処分に関しても驚くほどに寛大なものであった。その処置のおおまかな内容は、藩主らの謹慎と国替えではなく賠償金の支払いというもので、新政府が会津藩に下した処分に比べると極端に緩やかなものであった。

この西郷の配慮のある処置に感銘を受けた庄内藩士らは、後に西郷と交流を結ぶことになる。

戊辰戦争 — 1

➤ 2018.10.01

➤ 著者：福田 賢治

(文：鹿児島市維新ふるさと館特別顧問福田賢治氏)

○鳥羽伏見の戦い

慶応3年（1867年）12月9日、王政復古が宣言され天皇親政が始まった。その2週間後の12月23日、江戸城二の丸が焼失、これは日頃江戸市中の治安を攪乱する浪士による仕業だとし、また、江戸の治安にあたっていた庄内藩の屯所に鉄砲が打ち込まれたことから、庄内藩など約2千人が浪人などの逃げ込む先であった薩摩藩邸を焼き討ちし薩摩藩留守居役の篠崎彦十郎ら50人程が死亡、50人余りが捕らえられ、残りは停泊していた薩摩船に逃れた。

慶応4年1月3日、将軍慶喜は「討薩の表」を掲げ、諸藩にも出兵を指示し、幕府軍は京都の薩長軍5千の兵を目指して鳥羽、伏見の両街道から進軍、「鳥羽伏見の戦い」が始まった。

しかし新政府は「錦の御旗」を掲げ、近代的装備と訓練された薩長軍を以て対抗、幕府軍はもろくも敗れた。しかも慶喜は、錦の御旗をみて戦意を失い、会津藩主松平容保らを伴い、軍艦「開陽丸」で江戸へ逃げ帰り、自ら寛永寺に謹慎した。そして大奥の静寛院（和宮）や天璋院（篤姫）に対し、朝廷へのとりなしを依頼した。こうして幕府軍は一挙に崩壊、政府は近畿以西のすべての地域を支配下に置くことになった。

戊辰戦争 ― 2

○ 西郷・勝会談と江戸城無血開城

慶応4年2月3日「征討の号令」が発せられ、西郷は大総督府参謀となり、2月15日には東征軍が江戸へ向けて進発した。西郷は薩軍を率いて東海道を進み、駿府（静岡）へ入った。5日に駿府に入った東征大総督は「3月15日をもって江戸城総攻撃」を全軍に伝達した。

これに対し、幕府は勝海舟を陸軍総裁に任命した。勝海舟は山岡鉄舟に西郷宛の手紙を持たせ、薩摩藩邸焼き討ち事件の際の人質益満休之助を随行させ、西郷の元へ派遣した。西郷は勝が山岡に託した手紙を読んだのち、徳川氏処置を寛大にするための前提条件として、「江戸城明け渡し」など七項目を山岡に提示したが、山岡は「将軍慶喜公を臣下の備前藩に預けるのだけは承知できない」と強く主張した。西郷は「慶喜公の処分については自分一人の考えでは決められないが、自分が責任をもって取り計らうので、とりあえずこの七項目を勝先生に見せてほしい」と山岡に話して帰した。

その後、西郷・勝会談が、3月13日高輪薩摩藩邸で、14日は田町の薩摩藩蔵屋敷で行われた。勝は護衛もつけず一人で馬に乗ってやってきた。勝は江戸城引渡しや慶喜の助命、徳川家存続など、改めて条件を付して西郷に提示した。西郷は勝の誠意に応え、その場で「明日の江戸城総攻撃の中止」を決定して全軍へ伝達させた。西郷は直ちに上京し、「慶喜の死を免ずるよう」新政府の要人たちを説得、また、「慶喜の身柄は水戸藩にお預け」、「徳川家の存続及びその後継者を田安亀之助（家達）とする」など、ほぼ勝が提示した条件を満たす形で新政府の了解を取り付け、急ぎ駿府に帰り大総督にも報告した。

こうして4月11日、江戸城の無血開城が行われたが、大奥では天璋院が納得せず、勝は事前に天璋院説得にも当たった。また、こうした新政府の処置に不満を持つ幕臣たちは、上野の寛永寺に籠り、「彰義隊」と称して政府軍に抵抗する構えを示したため、政府軍は5月15日、大村益次郎を総大将として寛永寺を攻撃、一日にしてこれを鎮圧した。西郷率いる薩摩軍は、最も激戦が予想された南面正門（黒門）から進撃しこれを打ち破った。上野戦争終結後、徳川家には駿河70万石が与えられ、田安家の亀之助が徳川家を継いだ。

戊辰戦争 ― 3

○「奥羽越列藩同盟」と東北戦争

東征軍はさらに北上したが、仙台・米沢など東北14藩は白石城に会して輪王寺宮を総裁に立てて同盟を結び、会津藩赦免を新政府に嘆願したが拒否された。そのため新たに「奥羽同盟」を結び、再度征討の中止を政府に嘆願したがこれも拒否されたことから北越の6藩も加わり「奥羽越列藩同盟」を結び会津藩、庄内藩も加わり、政府軍と全面对決となった。しかし、装備や兵力に勝る政府軍によって長岡、仙台、米沢が次々降服、9月22日には会津藩、26日には最後に残った庄内藩も降服して東北戦争は終結した。

○函館戦争

東北戦争はこうして収まったのであるが、旧幕府海軍副総裁であった榎本武揚は、江戸城開城と同時に8月19日、「開陽丸」など幕府の軍艦4隻で館山を出港して10月20日函館に上陸し、五稜郭を拠点に北海道全土を支配した。これには新選組副長の土方歳三や旧幕臣の大鳥圭介をはじめ、約2千人余りが同行した。このため政府は、翌年（明治2年）3月黒田清隆を参謀として5月海陸両面から五稜郭攻めを敢行させ、黒田は降服するよう説得し5月18日、ついに榎本、大鳥はじめ数百名が降服、函館戦争は終結した。黒田は榎本武揚の人物にほれ込み、自ら坊主となって助命嘆願したため、榎本は死罪を免れた。

庄内藩と西郷のつながり②

➤ 2018.10.02

➤ 著者：東川 隆太郎

東北戦線における庄内藩の余力を残しての降伏は、彼らに対する寛大な処置にもつながりました。ただ、その寛大さは庄内藩士らにとって驚きであったようで、直接降伏に関与した黒田清隆の上司・西郷吉之助に興味を抱かれることになりました。

まず明治3（1870）年11月、庄内藩最後の藩主であった酒井忠篤ら一行約70名が、西郷に会うことを目的として鹿児島を訪れます。酒井公らは翌年の3月まで鹿児島に滞在し、親交を深めました。さらに明治8（1875）年5月にも旧庄内藩士の菅実秀など8名が鹿児島を訪れ、20日間ほど滞在しています。

西南戦争を経て、明治22（1889）年の大日本帝国憲法発布をきっかけとして西郷の賊名が除かれた際、この時を待っていたかのように、かつて親交を結んだ菅実秀が中心となり「南洲翁遺訓」が編纂されることになります。これは西郷の哲学を知る上でも重要な書物ですが、庄内藩士らとの交流がなければ生まれることのなかったのです。

慶応4・明治元（1868）年の忙しい大久保利通

➤ 2018.11.01

➤ 著者：東川 隆太郎

西郷吉之助にとって、150年前の慶応4年と明治元年は戦場に赴く時間が多い年でもありました。一方、大久保利通は前線で活動よりも後方支援または新政府の樹立に向けた活動に勤しむ日々を送っていました。そのなかでも大仕事のひとつが、翌年に実現する都を東京へと移す東京奠都です。始め大久保は、大坂への奠都を計画しますが太政官で否決されてしまいます。そうしたなか、江戸城の開城などによって7月17日に江戸の名称を東京と改めることにし、天皇の東京行幸を推進します。こうして10月13日に天皇は、江戸城に入って東京城と改名し、翌年の3月28日に東京城は皇城こと皇居と定められます。まさに、江戸を救った西郷と東京をつくった大久保といえる大仕事でした。

新政府の始動と西郷・大久保 — 1

➤ 2018.11.28

➤ 著者：福田 賢治

(文：鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 福田賢治氏)

○ 新しい国家の体制づくり

王政復古を声高に発した朝廷、および薩長土肥を中心とする新政府の要人たちは、まだ戊辰戦争の完全な終結をみないうちに、新国家の体制づくりに取りかからねばならなかった。その中心は三条実美、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允らであった。

西郷はこの時期、専ら戊辰戦争終結に力を注いでいたが、会津、長岡、庄内と東北の雄藩が降服したことを受けて、東京に帰ってきた。東京では薩摩藩主の島津忠義が、あらたに新政府の軍務総督として任命され、天皇から佩刀も賜っていた。これを知った西郷は忠義に軍務総督を辞退させ、佩刀も返上させて忠義と共に鹿児島へ帰国、自らも中央政界から身を引いたのである。

西郷は、当時、新政府の要人や軍事担当者など広範に亘り薩摩が主導していたが故に、世間では、「幕府は瓦解したが、今度は薩摩政府が誕生するのではないか」との風評があった。その疑念を払拭するとともに、新政府始動にあたっては、民衆を含めた新しい近代国家建設の出発点としたかったのである。

西郷は以後、明治4年1月に上京するまで、政府の再三にわたる中央政界復帰要請にも関わらず、鹿児島に留まったのである。国が一つにまとまり、近代国家建設という「順聖院様(斉彬)の御深意」を達成し、これで「自分の使命は終わった」との思いがあったのであろう。

新政府の始動と西郷・大久保 ― 2

○ 新政府の課題と中央政界への西郷呼び戻し

しかし、政府の要人たちが西郷を野に置いておくはずもなく、旧来の主従関係に基づく地方政治から「中央集権国家」へと変貌するには、西郷は欠かせない重要な人物であった。新国家の体制づくりには、土地や人民を朝廷に還す「版籍奉還」、旧藩主や門閥派の影響力を排除するための「廃藩置県」、国家財政の安定化のための「地租改正」、国の防衛・治安維持のための「徴兵制度」や「警察制度」、国民の文化・教育向上のための「学校制度」、それに「産業の育成」と課題が山積していた。なかでも、最も重要な課題が「廃藩置県」であり、これを断行すれば、また全国的に大騒乱が起こると予想された。事実、明治4年7月の廃藩置県の実施については、政府部内でも激論が展開されたのである。

こうした事態が予想されたため、明治3年1月大久保利通は、中央政界に西郷を引き戻すため鹿児島に帰国、久光と西郷の上京を掛け合ったが、久光は同意しなかった。西郷は日当山温泉で療養していたが、島津忠義がわざわざ日当山まで西郷を訪ね、「鹿児島の改革に力を貸して欲しい」と要請したため、鹿児島の藩政改革にかかわっていた。それ故、久光と西郷を中央政界に引き戻すには、どうしても久光の同意が必要だったのである。

新政府の始動と西郷・大久保 ― 3

○ 大久保利通と久光の決別

西郷本人も中央政界復帰の意思はなく、本人説得のために従弟の大山巖や弟の西郷従道も帰郷し説得に当たった。久光は新政府の欧化政策に不満を持っていたという。そのため大久保たちの説得工作は困難を極め、明治3年1月に帰国以来、9回にわたり久光と面会し激論を交わしたが失敗し上京へ戻ったが、久光説得には勅使を派遣する以外にないとして、再びその年の12月18日、岩倉具視を勅使とし、西郷と親しい山県有朋(長州)、川村純義(西郷従兄弟)を伴い鹿児島へ来た。勅使が来たとあっては久光も拒否できず、自分は病気のため来春上京すると返事、西郷の上京を許可した。こうして西郷引き出し問題は、約1年を要してやっと実現した。しかし、それまで主従関係で固く結ばれ、安政6年(1860年)から10年間続いた久光と大久保の信頼関係も、この件をきっかけに完全に瓦解し、以後、大久保の心は久光から完全に離れていったのである。

明治元年を忙しく過ごした小松帯刀

➤ 2018.12.10

➤ 著者：東川 隆太郎

明治新政府の樹立によって忙しさが増したのは、西郷や大久保ばかりではありません。薩摩藩の家老であった小松帯刀も、藩の仕事よりも新政府の仕事に尽力した年でした。まず、役職としては1月28日に参与兼外国事務掛を命じられます。これは外国との交渉などを行う役で、各国に交渉事などは徳川幕府に代わり、新政府が行うことを通告してからの対応となりました。

小松が外国事務掛に就任してすぐに、堺において土佐藩士がフランス水兵を殺害する事件が発生し、この事件の対応が最初の大仕事となりました。その他、長崎の浦上で発見されたキリスト教徒らの処置にも尽力しました。このように、様々な案件を抱える毎日でしたが、多忙も影響してか、体調不良も表面化してきます。

小松は、能力と人望に恵まれているだけに、明治に入ってますます忙しく生きることを強いられたのです。

凱旋兵士による藩政の掌握

➤ 2019.01.04

➤ 著者：東川 隆太郎

戊辰戦争に従軍した薩摩藩兵は、約6000人でした。彼らは、北越や東北などの戦況に応じて鹿児島に帰郷し、勝利の勢いと共に藩庁に対して藩政の改革を要求するようになります。

こうした凱旋兵士は鹿児島城下の下級武士が中心で、戊辰戦争開始以前から急進的な倒幕論者が多い傾向にありました。特に指導的地位にあったのは、川村純義や伊集院兼寛などで島津久光に対して門閥の打破や能力や功績に応じた人材の登用を建白しました。当時の島津久光は、子息らが門閥として藩政の中枢にあることから、こうした要求に対してはそれなりの苦悩があったと考えられます。そのため、久光は新政府の仕事に従事している小松帯刀や吉井友実らを帰国させて、凱旋兵士の対応を命じています。また、明治2年には大久保利通も帰郷させています。

さらに西郷隆盛にも藩政に復帰するように促し、島津忠義は日当山温泉に湯治中の西郷のもとを訪ねています。このように、明治元年から2年にかけては、薩摩藩にとって、また島津久光ら藩の首脳にとっても、これまでにない問題の解決を迫られる時期でありました。

廃仏毀釈の嵐が吹き荒れる鹿児島藩

➤ 2019.02.01

➤ 著者：東川 隆太郎

明治2（1869）年は、鹿児島の寺院にとっては受難の年となりました。それは廃仏毀釈と呼ばれる出来事で、藩内にある1066寺を全て廃寺にするという動きがあったためです。こうした動きは、すでに島津斉彬が藩政を担っていた時期からも徐々に始まっていましたが、島津家ゆかりの寺院にまで及んだのは明治2年のことでした。

明治新政府によって、明治元年に「神仏分離令」が発布されたことがひとつの転機となり、動きは加速されることになりました。また、明治2年に島津忠義の夫人の葬儀が仏式ではなく神式で実施されることになったことも影響が大きかったとされています。

こうして、島津忠良の菩提寺であった日新寺や島津貴久の菩提寺であった南林寺も、例外なく廃寺となります。明治維新の影で鹿児島では、貴重な仏教文化や美術が失われる不幸な出来事があったのです。

明治2年以降の鹿児島

➤ 2019.03.01

➤ 著者：東川 隆太郎

明治2（1869）年、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた鹿児島に着任した外国人がいる。イギリス人医師のウィリアム・ウィリスで、鹿児島の近代医学発展に貢献した人物である。ウィリスは、鹿児島到着後に医学校と病院を設置し、現在の滑川市場近くには、後に赤倉病院と呼ばれるレンガと石の外壁が見事な建物ができた。

また同じ明治2年には、前田正名や高橋新吉らが尽力した英和辞典である「薩摩辞書」が出版されている。これにより英語を学ぶことが随分と容易になることにつながった。出版者のひとりである前田正名は、後にフランスに留学して「農学」を学び、日本全体の農業振興に活躍することになる。

このように、西欧の知識が直接導入される状況になり、鹿児島のみならず日本は大きく変化していくことになる。ただ、こうした時代の波に乗り切ることにはできない旧士族らも鹿児島には多数存在し、こうした閉塞感は西南戦争に連なっていくことになる。明治維新とは鹿児島にとってなんだったのか、次の明治維新200周年までにさらに検証されていくことを切に願いたい。